

**IBM Spectrum Protect Suite
Front End**



ライセンス交付ガイド

バージョン 8.1

**IBM Spectrum Protect Suite
Front End**



ライセンス交付ガイド

バージョン 8.1

お願い:

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 77 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Spectrum Protect Suite – Front End バージョン 8 リリース 1 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Spectrum Protect Suite
Front End
Licensing Guide
Version 8.1
Second edition (February 2017)

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 2014, 2017.

目次

| | | | |
|---|-----------|---|-----------|
| 新機能. | v | IBM Spectrum Protect for Space Management . . . | 48 |
| | | IBM Spectrum Protect for Virtual Environments . . . | 49 |
| 第 1 章 オファリングの概要 | 1 | 第 5 章 アプリケーション固有のコマンド | |
| データの測定方法. | 2 | によるフロントエンド容量の測定 | 53 |
| よくある質問 (FAQ). | 9 | IBM Spectrum Protect for Databases | 53 |
| フロントエンド TB 定義. | 12 | IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource | |
| 製品ごとのフロントエンド定義. | 13 | Planning | 56 |
| フロントエンド測定のワークシート | 14 | IBM Spectrum Protect Snapshot | 60 |
| 第 2 章 スクリプトによるフロントエンド | | IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection | |
| 容量の測定 | 21 | for Microsoft Exchange Server. | 64 |
| 第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測 | | IBM Spectrum Protect for Space Management . . . | 65 |
| 定 | 25 | IBM Spectrum Protect for SAN | 66 |
| Central Reporting Tool | 26 | IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: | |
| 第 4 章 製品ごとのコマンド・ライン引数 31 | | Data Protection for VMware | 67 |
| IBM Spectrum Protect Extended Edition | 31 | 第 6 章 IBM Spectrum Protect API バ | |
| IBM Spectrum Protect for Mail | 33 | ックアップ | 71 |
| IBM Spectrum Protect for Databases | 36 | 付録. このバージョンで含まれなくなった | |
| IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource | | 製品のスクリプト | 73 |
| Planning | 38 | 特記事項 | 77 |
| IBM Spectrum Protect Snapshot | 41 | | |

新機能

IBM Spectrum Protect Suite Entry – Front End の 2 サーバーの制限が削除されました。

変更情報と新規情報は、変更箇所の左の垂直バー (I) で示されています。

第 1 章 オファリングの概要

IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、成長に合わせて支払いを行う柔軟なデータ保護を提供します。

IBM Spectrum Protect Suite – Front End には、以下の機能があります。

- 8 個の IBM Spectrum Protect 製品のバンドル
- 価格設定およびライセンス交付は、フロントエンドのテラバイト測定基準に基づきます
- 環境の保護に役立つ、バンドル・コンポーネントの必要に応じたインストール

IBM Spectrum Protect Suite Entry – Front End には、以下の機能があります。

- 8 個の IBM Spectrum Protect 製品のバンドル
- 価格設定およびライセンス交付は、フロントエンドのテラバイト測定基準に基づきます
- 環境の保護に役立つ、バンドル・コンポーネントの必要に応じたインストール
- 最大 100 テラバイトの結合データに対するテラバイト課金単位ごとの価格設定

本書では、特に明記しない限り、名前「IBM Spectrum Protect Suite – Front End」は両方のオファリングで同義的に使用されます。

- IBM Spectrum Protect Suite – Front End
- IBM Spectrum Protect Suite Entry – Front End

使用可能な製品

両方の IBM Spectrum Protect Suite – Front End オファリングに、以下の IBM Spectrum Protect 製品が含まれます。

IBM Spectrum Protect Snapshot 8.1

アプリケーションおよびファイル・システムの拡張スナップショット・バックアップおよびリストア機能

IBM Spectrum Protect for Databases 8.1

Oracle および Microsoft SQL データの非破壊的な保護

IBM Spectrum Protect Extended Edition 8.1

拡張が非常に容易なエンタープライズ・クラスのバックアップ/リストア、アーカイブ、および災害復旧

IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning 8.1

重要な SAP データベース・システムを効率的に、一貫性を持って、確実に保護します

IBM Spectrum Protect for Mail 8.1

Microsoft Exchange Server データを保護し、Microsoft Exchange Server オブジェクトのきめ細かいリストア処理を提供します

IBM Spectrum Protect for Space Management 8.1

非アクティブ・データを移動することで、オンライン・ディスク・スペースをレクラメーション処理します

IBM Spectrum Protect for SAN 8.1

IBM Spectrum Protect サーバーおよびクライアント・コンピューターのストレージ・ネットワーク接続を最大化します

IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 8.1

VMware 環境および Microsoft Hyper-V 環境の先進の保護および柔軟なリカバリー

データの測定方法

IBM Spectrum Protect Suite – Front End の容量価格設定およびライセンス交付は、保護される基本データのサイズに対するテラバイト (TB) ごとの課金に基づきます。

複製されたデータに対してライセンス交付を受ける必要はありません。

IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、ライセンス交付のために以下のデータを測定します。

ファイル・システム・バックアップ

保護ファイルのアクティブ・バックアップが測定されます。アクティブ・バックアップは、最新のバックアップ・ファイルから構成されます。このバックアップは、最新のリカバリー・ポイントに保護ファイルをリストアするためにリカバリーされるデータの代表です。

IBM Spectrum Protect Snapshot バックアップ

アプリケーションの保護された基本データの使用サイズが測定されます。トランザクション・ログ・ファイルは、ライセンス交付のための測定に含まれません。

その他のすべてのアプリケーション・バックアップ

アプリケーションの保護された基本データの使用サイズが測定されます。トランザクション・ログ・ファイルは、ライセンス交付のための測定に含まれません。

注: 本書で説明している方法は、計画および見積もりを目的としています。


IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、バイナリー TB 測定を使用します。

1 TB = 2^{40} = 1 099 511 627 776 bytes

以下のステップを実行して、IBM Spectrum Protect Suite – Front End 製品の容量を測定します。測定プロセスは、以下の順序で実行されます。

1. 次のように、保護データのフロントエンド容量を測定します。

Operations Center での測定

容量使用量を動的にモニターするには、Operations Center が提供するライセンス計算 (「」 > 「ライセンス交付」) を使用します。追加

情報については、Operations Center のオンライン・ヘルプまたはクライアント製品資料を参照してください。

スクリプトによる測定

IBM Spectrum Protect サーバーまたはアプリケーション・サーバーに対して、提供されたスクリプトを実行します。Central Reporting Tool を使用して、要約レポートを作成します。

アプリケーション固有のコマンドによる測定

アプリケーション固有のコマンドを使用してフロントエンド容量測定を計算します。アプリケーションごとにステップバイステップの手順が提供されています。

2. 測定に関する出力ファイルを 1 カ所 (ファイル・サーバー上のディレクトリーなど) にまとめて置きます。
3. すべての出力データがその場所で使用可能になるまで ステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。
4. 出力ファイルに対して Central Reporting Tool を実行します。このプログラムは、すべての個別の出力ファイルを解析し、最終的な出力の測定値を作成します。
5. アプリケーション固有のコマンドによる測定も実行された場合、以下のいずれかの方法を使用して、これらの測定値を IBM Spectrum Protect Suite – Front End 全体の容量測定に加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT、.CSV、または .JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定スクリプト

表 1. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Linux システム用の 測定スクリプト

| Linux システム用のスクリプト | 名前 | 説明 |
|-------------------|---|--|
| dsmfecc | Central Reporting Tool | 単一の XML レポートおよび要約レポートを作成するコマンド・ライン・インターフェース。 |
| dsmfecc-00.pl | IBM Spectrum Protect Extended Edition 測定スクリプト | IBM Spectrum Protect 環境を照会し、すべての IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのフロントエンド容量を報告します。 |

表 1. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Linux システム用の 測定スクリプト (続き)

| Linux システム用のスクリプト | 名前 | 説明 |
|-------------------|---|--|
| dsmfecc-02.pl | Data Protection for Oracle 測定スクリプト | <p>アプリケーション・サーバーを照会し、すべての Oracle Server データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: Oracle インスタンス所有者が使用できる Oracle Server への接続が存在している必要があります。</p> |
| dsmfecc-03.pl | Data Protection for SAP for DB2 測定スクリプト | <p>アプリケーション・サーバーを照会し、すべての SAP for DB2 データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: DB2 インスタンス所有者が使用できる SAP Database Server への接続が存在している必要があります。</p> |
| dsmfecc-04.pl | Data Protection for SAP for Oracle 測定スクリプト | <p>アプリケーション・サーバーを照会し、すべての SAP for Oracle データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: Oracle インスタンス所有者が使用できる SAP Database Server への接続が存在している必要があります。</p> |
| dsmfecc-05.pl | Data Protection for SAP HANA | <p>アプリケーション・サーバーを照会し、すべての SAP HANA データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> |
| dsmfecc-08.pl | IBM Spectrum Protect for Space Management 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect 環境を照会し、すべての事前マイグレーション済みファイルおよびマイグレーション済みファイルのフロントエンド容量を報告します。</p> |

表 1. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Linux システム用の 測定スクリプト (続き)

| Linux システム用のスクリプト | 名前 | 説明 |
|-------------------|--|---|
| dsmfecc-10.pl | Data Protection for VMware 測定スクリプト | <p>アプリケーション・サーバーを照会し、すべての VMware 仮想マシンのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: dsmfecc-10.pl を発行するシステムに、VMware vSphere PowerCLI がインストールされている必要があります。</p> |
| dsmfecc-15.pl | IBM Spectrum Protect Snapshot for DB2 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、すべての DB2 データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。</p> |
| dsmfecc-16.pl | IBM Spectrum Protect Snapshot for Oracle 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、すべての Oracle データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。</p> |
| dsmfecc-17.pl | IBM Spectrum Protect Snapshot for Oracle in SAP environments 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、SAP 環境内のすべての Oracle データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。</p> |

表 1. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Linux システム用の 測定スクリプト (続き)

| Linux システム用のスクリプト | 名前 | 説明 |
|-------------------|---|---|
| dsmfecc-18.pl | IBM Spectrum Protect Snapshot for Custom Applications 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、すべてのファイル・システムまたはカスタム・アプリケーションのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件: このスクリプトを実行するには、IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンス所有者でなければなりません。</p> |

表 2. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Microsoft Windows 用の 測定スクリプト

| Microsoft Windows 用のファイル | 名前 | 説明 |
|--------------------------|--|--|
| dsmfecc.exe | Central Reporting Tool | 単一の XML レポートおよび要約レポートを作成するコマンド・ライン・プログラム。 |
| dsmfecc-00.ps1 | IBM Spectrum Protect Extended Edition 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect 環境を照会し、すべての IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>Windows PowerShell でこのスクリプトを実行します。</p> |
| dsmfecc-01.ps1 | Data Protection for Microsoft SQL Server 測定スクリプト | <p>アプリケーション・サーバーを照会し、すべての Microsoft SQL Server データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>Windows PowerShell でこのスクリプトを実行します。</p> <p>前提条件: このシェルスクリプトで使用する Microsoft SQL Server への接続が存在する必要があります。</p> |

表 2. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Microsoft Windows 用の 測定スクリプト
(続き)

| Microsoft Windows 用のフ ァイル | 名前 | 説明 |
|------------------------------|---|--|
| dsmfecc-02.ps1 | Data Protection for Oracle 測定スクリプト | アプリケーション・サーバー を照会し、すべての Oracle Server データベースのフロン トエンド容量を報告します。 前提条件: Oracle インスタ ンス所有者が使用できる Oracle Server への接続が存 在している必要があります。 |
| dsmfecc-03.ps1 | Data Protection for SAP for DB2 測定スクリプト | アプリケーション・サーバー を照会し、すべての SAP for DB2 データベースのフロン トエンド容量を報告します。 前提条件: DB2 インスタンス 所有者が使用できる SAP Database Server への接続が 存在している必要があります。 |
| dsmfecc-04.ps1 | Data Protection for SAP for Oracle 測定スクリプト | アプリケーション・サーバー を照会し、すべての SAP for Oracle データベースのフロ ントエンド容量を報告しま す。 前提条件: Oracle インスタ ンス所有者が使用できる SAP Database Server への接続が 存在している必要があります。 |
| dsmfecc-06.ps1 | Data Protection for Microsoft Exchange Server 測定スクリプト | アプリケーション・サーバー を照会し、すべての Microsoft Exchange Server データベースのフロントエン ド容量を報告します。 Windows PowerShell でこの スクリプトを実行します。 前提条件: このシェルで使用 できる Microsoft Exchange Server への接続が存在してい る必要があります。 |

表 2. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Microsoft Windows 用の 測定スクリプト
(続き)

| Microsoft Windows 用のフ ァイル | 名前 | 説明 |
|------------------------------|---|---|
| dsmfecc-10.ps1 | Data Protection for VMware 測定スクリプト | <p>アプリケーション・サーバー を照会し、すべての VMware 仮想マシンのフロ ントエンド容量を報告しま す。</p> <p>前提条件: dsmfecc-10.ps1 を 発行するシステムに、 VMware vSphere PowerCLI がインストールされている必 要があります。</p> |
| dsmfecc-11.ps1 | Data Protection for Microsoft Hyper-V 測定スク リプト | <p>アプリケーション・サーバー を照会し、すべての Hyper-V 仮想マシンのフロ ントエンド容量を報告しま す。</p> |
| dsmfecc-13.ps1 | IBM Spectrum Protect Snapshot for Microsoft Exchange Server 測定スクリ プト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、す べての Microsoft Exchange Server データベースのフロ ントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件:</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライ ン・インターフェースを実 行し、Windows 管理コマ ンドを実行する権限が必要 です。 • Windows PowerShell バ ージョン 3 以上を使用す る必要があります。 |

表 2. IBM Spectrum Protect Suite – Front End Microsoft Windows 用の 測定スクリプト
(続き)

| Microsoft Windows 用のファイル | 名前 | 説明 |
|--------------------------|--|--|
| dsmfecc-14.ps1 | IBM Spectrum Protect Snapshot for Microsoft SQL Server 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、すべての Microsoft SQL Server データベースのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件:</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースを実行し、Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。 • Windows PowerShell バージョン 3 以上を使用する必要があります。 |
| dsmfecc-18.ps1 | IBM Spectrum Protect Snapshot for Custom Applications 測定スクリプト | <p>IBM Spectrum Protect Snapshot 環境を照会し、すべてのファイル・システムまたはカスタム・アプリケーションのフロントエンド容量を報告します。</p> <p>前提条件:</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースを実行し、Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。 • Windows PowerShell バージョン 3 以上を使用する必要があります。 |

よくある質問 (FAQ)

このトピックでは、いくつかのよくあるご質問 (FAQ) に対する回答を見つけることができます。

- フロントエンド容量はわかっています。すべてのアプリケーションに対して測定スクリプトを実行することなく要約レポートを生成する方法は？

Central Reporting Tool fastpath パラメーターを指定します。詳しくは、26 ページの『Central Reporting Tool』を参照してください。

- Windows、Linux、または AIX システム上でツールを実行する方法は？

コマンド・プロンプトを開き、IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定ツールを解凍したディレクトリーに移動します。コマンド・プロンプトを開く手順については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。一部の測定ツールには、root ユーザー権限 (Linux または AIX) または管理者権限 (Windows) が必要です。

- IBM Spectrum Protect サーバーが Windows、Linux、または AIX システム上で稼働しません。フロントエンド容量を測定する方法は？

以下の製品の測定スクリプトは、管理接続を使用して IBM Spectrum Protect サーバーを照会します。

- Data Protection for VMware
- IBM Spectrum Protect Extended Edition

測定スクリプトは、IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントがインストールされている任意のノードで実行されます。その結果、IBM Spectrum Protect サーバーのオペレーティング・システムおよびハードウェアは、データ収集に影響しません。

以下の製品の測定スクリプトは、保護されたアプリケーションに接続されている任意の Linux または Windows のノード上で実行されます。

- Data Protection for Microsoft Exchange Server
- Data Protection for Microsoft Hyper-V
- Data Protection for Microsoft SQL Server
- Data Protection for Oracle
- Data Protection for SAP for DB2
- Data Protection for SAP for Oracle
- Data Protection for SAP HANA
- IBM Spectrum Protect for Space Management

その結果、IBM Spectrum Protect サーバーの照会は行われません。

- 測定スクリプトの実行に使用するパラメーターは？

各製品の測定スクリプトのコマンド・ライン・パラメーター、構文、および例は、31 ページの『第 4 章 製品ごとのコマンド・ライン引数』に記載されています。

- 容量測定に圧縮設定が与える影響は？

バックアップ操作時にデータに適用された圧縮設定は、容量測定には反映されません。ただし、実動サーバー上の基本データのサイズに影響する圧縮設定は、容量測定に反映されます。例えば、圧縮設定のためにデータベース内で使用されるストレージ・スペースが少なくなっている場合、減少した容量測定が返されます。

- 容量測定にデータベース・トランザクション・ログ・ファイルは含まれますか？

トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect backup-archive client によってデータベース・バックアップとは別個にバックアップされない限り、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付の容量測定に含まれません。

- 仮想マシン・ゲスト上で実行されているアプリケーションの容量を測定する方法は？

ゲスト内アプリケーションのフロントエンド容量測定は、アプリケーション・タイプおよびデータの保護方法に依存します。

- 以下のいずれかの製品をゲストとして実行している場合は、アプリケーション固有のツールを使用してフロントエンド容量を測定します。
 - Data Protection for Microsoft Exchange Server
 - Data Protection for Microsoft SQL Server
 - Data Protection for Oracle
- IBM Spectrum Protect for Virtual Environments およびエージェントの両方をゲストとして使用して仮想マシンを保護している場合、使用サイズは 1 回だけ測定する必要があります。VMware 容量の測定方法を説明したセクションを参照してください。
- IBM Spectrum Protect backup-archive client をゲストとして実行する場合、そのコンポーネントのフロントエンド容量を測定する方法について説明したセクションを参照してください。
- IBM Spectrum Protect backup-archive client をゲストとして実行し、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments を使用してゲストを保護する場合は、それらの製品のフロントエンド容量を測定する方法について説明したセクションを参照してください。
- *IBM Spectrum Protect Suite - Front End* にバンドルされている *IBM Spectrum Protect* 製品の資料の入手場所は？

IBM Spectrum Protect 製品の資料へのリンクは、バージョン固有の IBM Spectrum Protect Suite 情報ポータルで提供されています。情報ポータルは、IBM Spectrum Protect Suite products にあります。

- お客様サポートの入手方法は？

IBM ソフトウェア・サポートは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End 製品 ID (PID) を使用して購入された機能に対してのみ有効です。ライセンス交付ツールはカバーされていません。IBM ソフトウェア・サポートに連絡する際には、以下の表のいずれかの PID を指定して、資格がある支援を受けてください。

表 3. *IBM Spectrum Protect Suite – Front End* PID

| オファリング | PID |
|--|-----------------------|
| IBM Spectrum Protect Suite – Front End | 5725-X07 |
| IBM Spectrum Protect Suite Entry – Front End | 5725-X08 または 5641-FEA |

フロントエンド TB 定義

ライセンス所有者は、プログラムによって保護されるデータの総量に十分なライセンスを取得する必要があります。IBM Spectrum Protect Suite – Front End の場合、「プログラム」は、バンドルに含まれている IBM Spectrum Protect 製品を意味します。したがって、お客様は、IBM Spectrum Protect Suite – Front End バンドル内のすべての製品によって保護される総テラバイト (TB) 数に対するライセンス交付を受ける必要があります。特定のライセンス条項については、製品ライセンスを参照してください。

表 4 は、バンドルされた各製品、および IBM Spectrum Protect Suite – Front End TB ライセンスでライセンス交付を受ける必要があるオブジェクトの要約を示しています。

表 4. フロントエンド・テラバイト定義

| 製品 | 保護オブジェクト |
|---|--|
| IBM Spectrum Protect for Databases | データベースの使用サイズ (トランザクション・ログおよびレプリカ・データベース・コピーを除く) |
| IBM Spectrum Protect Extended Edition | アクティブ・バックアップ。 |
| IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning | データベースの使用サイズ (ログ・ファイルを除く)。 |
| IBM Spectrum Protect Snapshot | 保護されたデータベースまたはアプリケーションの使用サイズ。 |
| IBM Spectrum Protect for Mail | Microsoft Exchange Server: データベースの使用サイズ (トランザクション・ログおよびレプリカ・データベース・コピーを除く)。 |
| IBM Spectrum Protect for Space Management | スペース管理マイグレーションを行う前にバックアップすることが推奨されます。この測定には、IBM Spectrum Protect Extended Edition のアクティブ・バックアップが使用されます。マイグレーションされたファイルが IBM Spectrum Protect backup-archive client によってバックアップされていない場合、マイグレーションするファイルの事前マイグレーション済みサイズとマイグレーション済みサイズが使用されます。 |
| IBM Spectrum Protect for SAN | この製品は、IBM Spectrum Protect クライアントによって既に保護および測定されているデータを移動します。ライセンスのためにこの製品を測定する必要はありません。 |
| IBM Spectrum Protect for Virtual Environments | 保護された仮想マシンの使用サイズ。 |

製品ごとのフロントエンド定義

表 5 は、IBM Spectrum Protect Suite – Front End 製品バンドルに含まれている製品、および各製品に関連する測定基準について、詳しく説明しています。

表 5. 製品ごとのフロントエンド定義

| 製品 | 測定基準の要約 |
|--|--|
| IBM Spectrum Protect Extended Edition | 測定スクリプトが、IBM Spectrum Protect サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、IBM Spectrum Protect サーバーごとに IBM Spectrum Protect Extended Edition クライアントの活動データを統合します。 |
| IBM Spectrum Protect for Databases: Data Protection for Microsoft SQL Server | 測定スクリプトが、アプリケーション・サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、保護された Microsoft SQL Server データベースの使用サイズを統合します。 53 ページの『Data Protection for Microsoft SQL Server』では、 sp_spaceused コマンドを使用した手作業手順も使用可能です。 |
| IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server | 測定スクリプトが、アプリケーション・サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、保護された Microsoft Exchange Server 2007 (以降) データベースの使用サイズを統合します。 Data Protection for Microsoft Exchange Server では、 Get-MailboxDatabase -status コマンドを使用した手作業手順も使用可能です。 |
| IBM Spectrum Protect for Databases: Data Protection for Oracle | 測定スクリプトが、アプリケーション・サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、保護された 1 次 Oracle データベースの使用サイズを統合します。 55 ページの『Data Protection for Oracle』では、 select sum コマンドを使用した手作業手順も使用可能です。 |
| IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning | 測定スクリプトが、SAP データベース・サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、保護されたデータベースの使用サイズを統合します。 56 ページの『IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning』では、手作業手順も使用可能です。 |
| IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware | 測定スクリプトが、アプリケーション・サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、すべての VMware 仮想マシンの使用サイズを統合します。 Data Protection for VMware では、VMware vSphere PowerCLI get-vm を使用する手作業手順も使用可能です。 |

表 5. 製品ごとのフロントエンド定義 (続き)

| 製品 | 測定基準の要約 |
|--|--|
| IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for Microsoft Hyper-V | 測定スクリプトが、アプリケーション・サーバーに対して実行されます。このスクリプトは、すべての仮想マシンの使用サイズを統合します。 |
| IBM Spectrum Protect for SAN | N/A |
| IBM Spectrum Protect for Space Management | 測定スクリプトが、IBM Spectrum Protect 環境に対して実行されます。このスクリプトは、すべての事前マイグレーション・データおよびマイグレーション・データの使用サイズを統合します。 65 ページの『IBM Spectrum Protect for Space Management』では、 dsmdf コマンドを使用した手作業手順も使用可能です。 |
| IBM Spectrum Protect Snapshot | 測定スクリプト は、IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている環境に対して実行されます。このスクリプトは、保護されたデータベースまたはアプリケーションの使用サイズを統合します。 60 ページの『IBM Spectrum Protect Snapshot』では、 diskpart コマンド (Windows ファイル・システム) または df コマンド (Linux または UNIX ファイル・システム) を使用した手作業手順が使用可能です。その結果として得られるスペースは、保護されるアプリケーションおよびデータベースのサイズに手動で追加する必要があります。 |

フロントエンド測定ワークシート

環境内のフロントエンド容量の測定を準備する際には、このワークシートを参照用に印刷してください。

製品固有のパラメーターについては、31 ページの『第 4 章 製品ごとのコマンド・ライン引数』を参照してください。

環境内のフロントエンド容量を測定するには、以下のステップを実行します。

1. 次のように、Linux または Microsoft Windows システム上で IBM Spectrum Protect Suite – Front End ツールを実行します。
 - 以下の FTP ダウンロード・サイトから、ご使用のオペレーティング・システム用の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定ツールをダウンロードします。

ftp://public.dhe.ibm.com/storage/tivoli-storage-management/front_end_capacity_measurement_tools

Linux

`dsmfecc-linux.tar.gz`

Windows

`dsmfecc-windows.zip`

- 次のコマンドを使用して、ツールを解凍します。

```
Linux tar -zxvf dsmfecc-linux.tar.gz
```

```
Windows unzip -l dsmfecc-windows.zip
```

2. IBM Spectrum Protect サーバーからデータを収集します。環境内の IBM Spectrum Protect サーバー名を記録します。

- _____
- _____
- _____
- _____

IBM Spectrum Protect backup-archive client のアクティブ・バックアップからデータを収集します。

IBM Spectrum Protect backup-archive client がインストールされている Linux オペレーティング・システムまたは UNIX プラットフォーム上の各 IBM Spectrum Protect サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。IBM Spectrum Protect backup-archive client は、IBM Spectrum Protect サーバーに接続するように構成する必要があります。

```
dsmfecc-00.pl --tsmusername=user name --tspmpassword=password
--namespace=[NODENAME | *] --applicationentity=[filespace | *]
--directory=output directory
```

IBM Spectrum Protect backup-archive client がインストールされている Windows 上の各 IBM Spectrum Protect サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。IBM Spectrum Protect backup-archive client は、IBM Spectrum Protect サーバーに接続するように構成する必要があります。

```
dsmfecc-00.ps1 -tsmusername user name -tspmpassword password
-namespace [NODENAME | *] -applicationentity [filespace | *]
-directory output directory
```

Linux この例では、IBM Spectrum Protect サーバー上のすべてのクライアント・ノードのフロントエンド容量を照会します。

```
dsmfecc-00.pl --tsmusername=admin --tspmpassword=adminpw --namespace=*
--applicationentity=/SMSVT/mmfs1 --directory=/space/fe/srv1.out
```

3. 環境内の保護された Oracle データベースからデータを収集します。環境内の Oracle データベース名およびそのオペレーティング・システムを記録します。

- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。

Linux 上の各 Oracle サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecc-02.pl --namespace=name --applicationusername=user name
--directory=output directory
```

Windows 上の各 Oracle サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecce-02.ps1 -namespace name -applicationusername user name
-directory output directory
```

Windows この例では、既存のデータベース管理者アカウント SYSDBA を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 *test* を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecce-02.ps1 -namespace test -applicationusername sysdba -directory .
```

4. 環境内の保護された Microsoft SQL Server データベースからデータを収集します。環境内のデータベース名を記録します。

- _____ Microsoft SQL Server データベース
- _____ Microsoft SQL Server データベース
- _____ Microsoft SQL Server データベース
- _____ Microsoft SQL Server データベース

各 Microsoft SQL Server では、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecce-01.ps1 -namespace name -applicationentity database
-directory output directory
```

Windows この例では、現行の Microsoft SQL Server データベースのフロントエンド容量を照会します。これは、名前 *peter* を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecce-01.ps1 -applicationentity "." -namespace peter -directory .
```

5. 環境内の保護された SAP for DB2 データベースからデータを収集します。環境内の SAP for DB2 データベース名およびそのオペレーティング・システムを記録します。

- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。

Linux 上の各 SAP データベース・サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecce-04.pl --namespace=name --applicationusername=name
--directory=output directory
```

Windows 上の各 SAP データベース・サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecce-04.ps1 -namespace name -applicationusername name
-directory output directory
```

Linux この例では、SAP for DB2 データベース TESTDB のフロントエンド容量を照会します。これは、名前 *FREE* を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は /root/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。


```
> su - db2erp
> ./dsmfecc-03.pl --namespace=FREE --directory=/root/dsmfecc_out
--applicationentity=TESTDB
```

6. 環境内の保護された SAP for Oracle データベースからデータを収集します。環境内の SAP for Oracle データベース名およびそのオペレーティング・システムを記録します。

- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。
- Linux/Windows オペレーティング・システムの _____。

Linux 上の各 SAP データベース・サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecc-04.pl --namespace=name --applicationusername=name
--directory=output directory
```

Windows 上の各 SAP データベース・サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecc-04.ps1 -namespace name -applicationusername name
-directory output directory
```

Windows この例では、既存のデータベース管理者アカウント SYSDBA を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 test を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> su - oraerp
> .\dsmfecc-04.ps1 -namespace test -applicationusername sysdba -directory .
```

7. 環境内の保護された SAP HANA データベースからデータを収集します。環境内の SAP HANA データベース名を記録します。

- _____ SAP HANA データベース
- _____ SAP HANA データベース
- _____ SAP HANA データベース
- _____ SAP HANA データベース

Linux 上の各 SAP データベース・サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfecc-05.pl --applicationusername=username
--applicationpassword=password --applicationentity=database number
--namespace=instance name --directory=output directory
```

Linux この例では、HANA インスタンス vhana05 を指定して、1 つの SAP HANA データベースのフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> ./dsmfecc-05.pl --applicationpassword=manager --namespace=vhana05
--applicationusername=system --applicationentity=1 --directory=/tmp/dsmfecc_out
```

8. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されたデータベースまたはアプリケーションから、環境内のデータを収集します。環境内の各データベースまたはアプリケーションの名前を記録します。

- _____ データベースまたはアプリケーション
- _____ データベースまたはアプリケーション
- _____ データベースまたはアプリケーション
- _____ データベースまたはアプリケーション
- _____ データベースまたはアプリケーション
- _____ データベースまたはアプリケーション

- a. Linux 上で IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている各 DB2 データベースに対しては、以下のコマンド構文を使用します。このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。

```
dsmfec-15.pl --namespace=name --directory=output directory  
--applicationentity=database name --fcminstance=instance directory  
--fcprofile=path and name of profile
```

- b. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている各 Oracle データベースに対しては、Linux 上で以下のコマンド構文を使用します。このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。

```
dsmfec-16.pl --applicationpassword=password --namespace=name  
--directory=output directory --fcminstance=instance directory  
--fcprofile=path and name of profile
```

- c. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている SAP 環境内の各 Oracle データベースに対しては、Linux 上で以下のコマンド構文を使用します。このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。

```
dsmfec-17.pl --applicationpassword=password --namespace=name  
--directory=output directory --fcminstance=instance directory  
--fcprofile=path and name of profile
```

- d. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されているファイル・システムまたはカスタム・アプリケーションに対しては、Linux または Windows のコマンドを使用します。

Linux 上で以下のコマンド構文を使用します。このスクリプトを実行するには、IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンス所有者でなければなりません。指定したファイル・リストには、保護されたファイル・システムまたはカスタム・アプリケーション用の適切なディレクトリーが含まれている必要があります。

```
dsmfec-18.pl --directory=output directory --fcminstance=instance directory  
--fcprofile=path and name of profile --filelist=path and name of file
```

各ファイル・システムまたはカスタム・アプリケーションに対しては、Windows 上で以下のコマンド構文を使用します。IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースおよび Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。

```

| dsmfecc-18.ps1 -namespace name -directory output directory
| -fcminstance instance directory -tsmoptfile path and name of options file
| -configFile path and name of configuration file

```

- e. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている各 Microsoft Exchange Server に対しては、Windows 上で以下のコマンド構文を使用します。IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースおよび Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。

```

| dsmfecc-13.ps1 -namespace name -fcminstance instance directory
| -directory output directory -tsmoptfile path and name of options file
| -configFile path and name of configuration file

```

- f. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている各 Microsoft SQL Server データベースに対しては、Windows 上で以下のコマンド構文を使用します。IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースを実行し、Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。

```

| dsmfecc-14.ps1 -namespace name -fcminstance instance directory
| -directory output directory -tsmoptfile path and name of options file
| -configFile path and name of configuration file

```

9. IBM Spectrum Protect backup-archive client から、環境内で IBM Spectrum Protect for Space Management によって管理されているシステムの保護されたアクティブ・バックアップのデータを収集します。

IBM Spectrum Protect for Space Management を使用してファイルをマイグレーションする前に、それらのファイルをバックアップすることが推奨されます。したがって、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、IBM Spectrum Protect for Space Management によって管理されているシステムのアクティブ・バックアップを測定します。この測定には、IBM Spectrum Protect Extended Edition のアクティブ・バックアップが使用されます。

- 階層ストレージ管理 を使用してマイグレーションするファイルをバックアップしない場合、**dsmfecc-08.pl** 測定スクリプトの実行時にマイグレーションするファイルの事前マイグレーション済みサイズとマイグレーション済みサイズが使用されます。
- 階層ストレージ管理 を使用してマイグレーションするファイルをバックアップする場合、IBM Spectrum Protect Extended Edition の測定スクリプトを実行する場合にアクションは不要です。

Linux 上の保護された各アクティブ・バックアップでは、次のコマンド構文を使用します。

```

dsmfecc-08.pl --namespace=NODENAME --applicationentity=filespace
--directory=output directory

```

Linux この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 FOXTROT を指定して、ファイル・システム /SMSVT/mmfs1 のフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```

> ./dsmfecc-08.pl --namespace=FOXTROT --applicationentity=/SMSVT/mmfs1
--directory=/tmp/dsmfecc_out

```

10. 環境内の保護された VMware 仮想マシンからデータを収集します。環境内の VMware vCenter サーバー名およびそのオペレーティング・システムを記録します。

- Windows オペレーティング・システムの _____。
- Windows オペレーティング・システムの _____。
- Windows オペレーティング・システムの _____。
- Windows オペレーティング・システムの _____。

Windows 上の各 VMware vCenter サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfec-10.ps1 -applicationusername VMware vCenter user ID  
-applicationpassword password  
-applicationentity vCenter Server IP address or name  
-namespace name -asnode nodename -directory output directory  
-tsminstall client installation directory  
-dsmoptpath path and name of client options file
```

Windows この例では、VMware vCenter christo.mycompany.usa.com 上の保護された仮想マシンのフロントエンド容量を照会します。これは、名前 FREE を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリに書き込まれます。

```
> .\dsmfec-10.ps1 -namespace FREE -directory . -applicationusername administrator  
-applicationpassword adminpwd -applicationentity christo.mycompany.usa.com  
-asnode DEV_DC -dsmoptpath "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient\dev_dc.opt"  
-tsminstall "c:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient"
```

11. 環境内の保護された Microsoft Hyper-V 仮想マシンからデータを収集します。環境内の Microsoft Hyper-V サーバー名を記録します。

- _____ Microsoft Hyper-V サーバー
- _____ Microsoft Hyper-V サーバー
- _____ Microsoft Hyper-V サーバー
- _____ Microsoft Hyper-V サーバー

各 Microsoft Hyper-V サーバーでは、次のコマンド構文を使用します。

```
dsmfec-11.ps1 -namespace name -directory output directory
```

Windows この例では、既存のデータベース管理者アカウント SYSDBA を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 test を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリに書き込まれます。

```
> .\dsmfec-11.ps1 -namespace test -directory .
```

第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定

測定スクリプトを使用して IBM Spectrum Protect Suite – Front End バンドル製品のフロントエンド容量測定を自動的に計算するには、この手順を使用します。

始める前に

次の FTP ダウンロード・サイトから IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定ツールをダウンロードして解凍します。

ftp://public.dhe.ibm.com/storage/tivoli-storage-management/front_end_capacity_measurement_tools.

- 測定ツールは、`dsmfecc-windows.zip` ファイルおよび `dsmfecc-linux.tar.gz` ファイルにパッケージされています。
- 測定スクリプトのリストについては、3 ページの『IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定スクリプト』を参照してください。
- IBM Spectrum Protect サーバーは、バージョン 6.2 以降でなければなりません。
- 環境内で IBM Spectrum Protect backup-archive client がインストールされている任意の Linux または Windows システム上で、測定スクリプトを実行します。
- IBM Spectrum Protect backup-archive client バージョンは、IBM Spectrum Protect サーバーのバージョン 6.2 以降と互換性がなければなりません。互換性のあるバージョンのリストについては、技術情報「*TSM Server-Client Compatibility and Upgrade Considerations*」を参照してください。
<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21053218>

このタスクについて

このタスクは、IBM Spectrum Protect サーバーまたはアプリケーション・サーバーに対して IBM Spectrum Protect Suite – Front End 製品の測定スクリプトを実行する手順をガイドします。次に、Central Reporting Tool を実行して要約レポートを作成します。

手順

- 必要な引数を指定して測定スクリプトを実行します。このスクリプトは、環境の容量情報を含む出力ファイル (XML) を作成します。
必要な測定スクリプトの引数については、31 ページの『第 4 章 製品ごとのコマンド・ライン引数』を参照してください。
- IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に含めるすべての IBM Spectrum Protect 製品について、ステップ 1 を繰り返します。
- すべての測定出力ファイル (XML) を 1 カ所 (ファイル・サーバー上のディレクトリーなど) にまとめて置きます。Central Reporting Tool は、これらのファイルを解析し、全体の要約レポートを生成します。
- 全体の要約レポートを生成するには、必要な構文引数を指定して、次の Central Reporting Tool コマンドを発行します。

```
dsmfeccc --summary --<required_arguments>
```

例えば、次のコマンドを発行します。

```
root@blackpearl > ./dsmfeccc --summary --customerid=MyShop  
--directory=/tmp/dsmfeccc_out --format=TXT
```

次のフロントエンド測定情報を dsmfeccc.MyShop.20161104081326.txt ファイルに生成します。

```
root@blackpearl > cat /tmp/dsmfeccc_out/dsmfeccc.MyShop.20161104081326.txt  
  
***** IBM Spectrum Protect Suite - Front End *****  
***** Front-End Terabyte (TB) Capacity Report *****  
*****  
  
Component Name                                Product ID   Managed Objects   TB Protected  
-----  
IBM Spectrum Protect Client                    00           3,884,948         3660.066  
Data Protection for Microsoft SQL Server        01           383,838           0.734  
Data Protection for Oracle                      02           24,242           56.791  
IBM Spectrum Protect for Space Management (HSM) 08           5,858          9045.356  
-----  
Total                                           4,298,886      12762.947  
  
Customer ID                                     : MyShop  
Total Front End TB size associated with IBM Spectrum Protect  
Suite - Front End entitlement                   : 12762.947  
Date time of this report                        : Fri Nov  4 08:13:26 2016  
Collection dates                               : Wed Nov  2 12:09:05 2016  
                                                - Fri Nov  4 08:13:24 2016  
  
Input:  
/tmp/dsmfeccc_out/  
  
List of products and components associated with  
IBM Spectrum Protect Suite - Front End or IBM Spectrum Protect Snapshot.  
(However, based on the particular environment for which this report was generated, it may only  
include information for a subset of the complete list of products and components.)  
  
-----  
ID      Name  
00      IBM Spectrum Protect Extended Edition : IBM Spectrum Protect Client  
01      IBM Spectrum Protect for Databases : Data Protection for Microsoft SQL Server  
02      IBM Spectrum Protect for Databases : Data Protection for Oracle  
08      IBM Spectrum Protect for Space Management  
-----  
  
Abbreviations used in this report:  
ARC      Archive data  
HSM      Hierarchical storage management data  
FCM      IBM Spectrum Protect Snapshot data  
FE       IBM Spectrum Protect Snapshot front end data  
BE       IBM Spectrum Protect Snapshot back end data  
LUN      IBM Spectrum Protect Snapshot logical unit data  
OL       IBM Spectrum Protect Snapshot data offload to IBM Spectrum Protect Server  
NOL      IBM Spectrum Protect Snapshot no data offload to IBM Spectrum Protect Server  
FP       Information based on direct --fastpath input  
-----
```

この例では、保護されたフロントエンド TB 数は 12762.947 TB です。

5. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のいずれかのステップを実行します。

- Central Reporting Tool の要約出力 (ステップ 4 で生成) が環境内のすべての保護データに適用される場合、合計 TB 数は最も近い整数の TB に切り上げられます。

23688.14 TB = 23689 TB

IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要な合計フロントエンド TB 数は 23689 TB です。

- アプリケーション固有のコマンドによる測定も実行された場合、これらの測定値がステップ 4 で生成された Central Reporting Tool 要約出力に加算されます。

例えば、10 個の保護された SAP for Oracle データベースが含まれる環境の場合、保護されたすべての SAP for Oracle データベースの合計使用サイズは 3.48 TB です。

- a. ステップ 6 で生成された Central Reporting Tool 要約出力で示されている 23688.14 TB に 3.48 TB を加算します。

$$3.48 \text{ TB} + 23688.14 \text{ TB} = 23691.62 \text{ TB}$$

- b. 合計 TB 数を最も近い整数の TB に切り上げます。

$$23691.62 \text{ TB} = 23692 \text{ TB}$$

IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要な合計フロントエンド TB 数は 23692 TB です。

第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定

IBM Spectrum Protect Suite – Front End バンドル製品のフロントエンド容量測定を手動で計算して単一の XML レポートを生成するには、この手順を使用します。

手順

1. 53 ページの『第 5 章 アプリケーション固有のコマンドによるフロントエンド容量の測定』の説明に従って、ご使用の製品のフロントエンド容量測定を収集します。
2. 要約レポート用の XML 出力ファイルを作成するために必要な引数を確認するには、**dsmfecc --create** コマンドを実行します。

dsmfecc --create コマンドでは、以下のパラメーターが使用可能です。

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

productid *ID number*

IBM Spectrum Protect Suite – Front End のバンドル製品に関連付けられた 2 桁の ID 番号を指定します。例えば、製品 ID 00 は、IBM Spectrum Protect Extended Edition を示します。製品 ID 番号については、3 ページの『IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定スクリプト』を参照してください。

type [BACKUP | ARCHIVE | HSM | FCM]

以下の値のいずれか 1 つを指定します。

BACKUP

システム内のバックアップ・アクティビティーに関連する、測定するオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect backup-archive client (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 00) の単一のレポートを手動で作成するときにこの値を指定します。

ARCHIVE

システム内のアーカイブ・アクティビティーに関連する、測定するオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect backup-archive client (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 00) の単一のレポートを手動で作成するときにこの値を指定します。

HSM

システム内の 階層ストレージ管理 アクティビティーに関連する、カウントするオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect for Space Management クライアント (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 08) の単一のレポートを手動で作成する場合は、この値を指定します。

FCM

システム内のスナップショット・アクティビティに関連する、測定するオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect Snapshot for CAA (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 17) の単一のレポートを手動で作成する場合は、この値を指定します。

applicationentity name

容量測定に関連する固有の名前を指定します。例えば、ファイル・システム名あるいは GPFS クラスター名を指定します。この値は参照用であり、測定プロセスには影響しません。

numberofobjects number of objects

単一の XML レポートに含めるオブジェクトの数を指定します。例えば、5 個のデータベース・ファイルがある Oracle 環境の場合、5 を指定します。1,000 万個のファイルおよびディレクトリーがある IBM Spectrum Protect backup-archive client 環境の場合、10000000 を指定します。

size size of all objects

単一の XML レポートに含めるオブジェクト全体のサイズを指定します。このサイズは、MB 単位で測定されます。例えば、10000000 個のファイルを含め、各ファイルが 1 MB である場合、10000000 を指定します。

directory output directory

製品の測定値を含む出力ファイル (.XML) のディレクトリーを指定します。

fcmbenumberofobjects number of counted objects

オプションで、IBM Spectrum Protect Snapshot バックエンドに対してカウントするオブジェクト数を指定します。

fcmbesize size of counted objects

オプションで、IBM Spectrum Protect Snapshot バックエンドに対してカウントするオブジェクトのサイズを指定します。このサイズは、MB 単位で測定されます。

fcmlunnumberofobjects number of counted objects

オプションで、IBM Spectrum Protect Snapshot LUN に対してカウントするオブジェクト数を指定します。

fcmlunsize size of counted objects

オプションで、IBM Spectrum Protect Snapshot LUN に対してカウントするオブジェクトのサイズを指定します。このサイズは、MB 単位で測定されます。

3. IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に含めるすべての IBM Spectrum Protect 製品について、ステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。

Central Reporting Tool

単一レポート .XML ファイルを作成したり、出力 .XML ファイルを解析して要約レポートを生成したりします。

構文

フロントエンド容量がわかっている場合は、以下の "fastpath" Central Reporting Tool 構文を使用して、単一の .XML レポートと要約レポートの両方を作成することができます。

Linux

```
dsmfecc --fastpath --customerid=customer user ID --directory=inout and output directory --format=[TXT | CSV | JSON]
```

Windows

```
dsmfecc.exe --fastpath -customerid customer user ID -directory inout and output directory -format [TXT | CSV | JSON]
```

単一レポート .XML ファイルを作成するには、以下の Central Reporting Tool 構文を使用します。

Linux

```
dsmfecc --create= --namespace=name --productid=ID number [--type=BACKUP | ARCHIVE | HSM | FCM] --applicationentity=name --numberofobjects=number of objects --size=size of all objects --directory=output directory
```

Windows

```
dsmfecc.exe --create= --namespace=name --productid=ID number [--type=BACKUP | ARCHIVE | HSM | FCM] --applicationentity=name --numberofobjects=number of objects --size=size of all objects --directory=output directory
```

出力 .XML ファイルを解析して要約レポートを生成するには、以下の Central Reporting Tool 構文を使用します。

Linux

```
dsmfecc --summary --customerid=customer --directory=output directory --format=[CSV | TXT | JSON] [--reporttype=TSMSUR | FCMBE | FCMLUN]
```

Windows

```
dsmfecc.exe --summary -customerid customer -directory output directory -format [CSV | TXT | JSON] [--reporttype=TSMSUR | FCMBE | FCMLUN]
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--directory=/tmp/dsmfecc_out
```

fastpath

単一の .XML レポートと要約レポートの両方を作成します。要約レポートは、アスタリスク (*) を使用して、**fastpath** パラメーターを指定して生成された単一レポートを識別します。例えば、次のとおりです。

| Component Name | Product ID | Managed Objects | TB Protected |
|---|--|--|--------------|
| IBM Spectrum Protect Client | 00 | 3,837,474 | 3659.700 FP |
| Total | | 3,837,474 | 3659.700 |
| Customer ID | | : MyShop | |
| Total Front End TB size associated with IBM Spectrum Protect Suite - Front End entitlement | | : 3659.700 | |
| Date time of this report | | : Wed Nov 2 12:09:11 2016 | |
| Collection dates | | : Wed Nov 2 12:09:05 2016 - Wed Nov 2 12:09:05 2016 | |
| Input: /tmp/dsmfecc_out | | | |
| List of products and components associated with IBM Spectrum Protect Suite - Front End or IBM Spectrum Protect Snapshot. (However, based on the particular environment for which this report was generated, it may only include information for a subset of the complete list of products and components.) | | | |
| ID | Name | | |
| 00 | IBM Spectrum Protect Extended Edition : IBM Spectrum Protect Client | | |
| Abbreviations used in this report: | | | |
| ARC | Archive data | | |
| HSM | Hierarchical storage management data | | |
| FCM | IBM Spectrum Protect Snapshot data | | |
| FE | IBM Spectrum Protect Snapshot front end data | | |
| BE | IBM Spectrum Protect Snapshot back end data | | |
| LUN | IBM Spectrum Protect Snapshot logical unit data | | |
| OL | IBM Spectrum Protect Snapshot data offload to IBM Spectrum Protect Server | | |
| NOL | IBM Spectrum Protect Snapshot no data offload to IBM Spectrum Protect Server | | |
| FP | Information based on direct --fastpath input | | |

create

単一の XML レポートを作成します。

summary

出力 .XML ファイルを解析して、要約レポートを生成します。

customerid *customer*

要約レポートを識別する名前を指定します。

directory *output directory*

すべての 測定スクリプト 出力ファイル (.XML) が置かれるディレクトリーを指定します。

format [CSV | TXT | JSON]

要約レポートのファイル・フォーマットを指定します。以下を指定できます。

CSV

要約レポートをコンマ区切り値 (CSV) 形式で生成します。

TXT

要約レポートをプレーン・テキスト (.TXT) 形式で生成します。

JSON

JavaScript Object Notation (.JSON) 形式で要約レポートを生成します。

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

productid ID number

IBM Spectrum Protect Suite – Front End のバンドル製品に関連付けられた 2 桁の ID 番号を指定します。例えば、製品 ID 00 は、IBM Spectrum Protect Extended Edition を示します。製品 ID 番号については、3 ページの『IBM Spectrum Protect Suite – Front End 測定スクリプト』を参照してください。

type [BACKUP | ARCHIVE | HSM | FCM]

以下の値のいずれか 1 つを指定します。

BACKUP

システム内のバックアップ・アクティビティーに関連する、測定するオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect backup-archive client (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 00) の単一のレポートを手動で作成するときにこの値を指定します。

ARCHIVE

システム内のアーカイブ・アクティビティーに関連する、測定するオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect backup-archive client (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 00) の単一のレポートを手動で作成するときにこの値を指定します。

HSM

システム内の 階層ストレージ管理 アクティビティーに関連する、カウントするオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect for Space Management クライアント (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 08) の単一のレポートを手動で作成する場合は、この値を指定します。

FCM

システム内のスナップショット・アクティビティーに関連する、測定するオブジェクトの数およびオブジェクト全体のサイズ。例えば、IBM Spectrum Protect Snapshot for CAA (IBM Spectrum Protect Suite – Front End コンポーネント 17) の単一のレポートを手動で作成する場合は、この値を指定します。

applicationentity name

容量測定に関連する固有の名前を指定します。例えば、ファイル・システム名あるいは GPFS クラスタ名を指定します。この値は参照用であり、測定プロセスには影響しません。

numberofobjects number of objects

単一の XML レポートに含めるオブジェクトの数を指定します。例えば、5 個のデータベース・ファイルがある Oracle 環境の場合、5 を指定します。1,000 万個のファイルおよびディレクトリーがある IBM Spectrum Protect backup-archive client 環境の場合、10000000 を指定します。

size size of all objects

単一の XML レポートに含めるオブジェクト全体のサイズを指定します。この

サイズは、MB 単位で測定されます。例えば、10000000 個のファイルを含め、各ファイルが 1 MB である場合、10000000 を指定します。

directory output directory

製品の測定値を含む出力ファイル (.XML) のディレクトリーを指定します。

reporttype [TSMSUR | FCMBE | FCMLUN]

以下の値のいずれか 1 つを指定します。

TSMSUR

IBM Spectrum Protect Suite – Front End 単一レポートからの情報、および TSM 統合のフラグが立てられていない IBM Spectrum Protect Snapshot フロントエンド単一レポートからの情報を示す要約表を作成します。

何も指定されていない場合、これがデフォルト値です。

FCMBE

すべての IBM Spectrum Protect Snapshot バックエンド単一レポートからの情報を示す要約表を作成します。IBM Spectrum Protect Suite バックエンド・バンドルによって IBM Spectrum Protect Snapshot がライセンス交付を受けた際に Operations Center によって報告された IBM Spectrum Protect Suite バックエンド容量値に、IBM Spectrum Protect Snapshot バックエンド容量数を追加するには、このレポート・タイプを使用します。

FCMLUN

すべての IBM Spectrum Protect Snapshot LUN 単一レポートからの情報を示す要約表を作成します。IBM Spectrum Protect Suite または IBM Spectrum Protect Suite – Front End ではなく、標準の IBM Spectrum Protect Snapshot フロントエンド・ライセンスによってライセンス交付を受けたすべての IBM Spectrum Protect Snapshot クライアント・インスタンスの管理対象容量の要約を取得するには、このレポート・タイプを使用します。

例

Linux

この例では、COMPANY に関する要約表を作成します。レポートは、/tmp/dsmfecc_out ディレクトリー内のすべての 測定スクリプト 出力ファイルに基づきます。レポートは、TXT 形式で生成されます。

```
> dsmfecc --customerid=COMPANY --directory=/tmp/dsmfecc_out --format=TXT
```

Windows

この例では、COMPANY に関する要約表を作成します。レポートは、C:\tmp\dsmfecc_out ディレクトリー内のすべての 測定スクリプト 出力ファイルに基づきます。レポートは、CSV 形式で生成されます。

```
> dsmfecc.exe -customerid COMPANY -directory C:\tmp\dsmfecc_out -format CSV
```

第 4 章 製品ごとのコマンド・ライン引数

各 IBM Spectrum Protect Suite – Front End の測定スクリプトには、製品固有のパラメーターが必要です。

各製品の測定スクリプトの情報には、以下の情報が含まれます。

- 測定スクリプトの説明。
- 測定スクリプトの構文図。
- 測定スクリプトのパラメーターに関する詳細な説明。
- 測定スクリプトの使用例。

IBM Spectrum Protect Extended Edition

IBM Spectrum Protect Extended Edition 製品のフロントエンド容量は、保護ファイルのアクティブ・バックアップとして定義されます。

IBM Spectrum Protect Extended Edition の測定スクリプトおよび Central Reporting Tool を使用して、フロントエンド容量を測定します。

- データをアーカイブし、そのデータをバックアップしない場合、25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』の説明に従って、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力する必要があります。
- アクティブ・バックアップは、最新のバックアップ・ファイルから構成されます。このバックアップは、最新のリカバリー・ポイントに保護ファイルをリストアするためにリカバリーされるデータの代表です。
- ソース (保護サーバー) に存在するが、IBM Spectrum Protect クライアントの EXCLUDE オプションを使用してバックアップ操作から除外されたファイルは、アクティブ・バックアップで測定されません。その結果、これらの除外ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付のための測定に含まれません。
- IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付のための測定には、ソース・ファイルに適用された重複排除や圧縮の設定の効果は含まれません。
- IBM Spectrum Protect 管理コマンド・ライン・クライアント、および保護データが含まれるすべての IBM Spectrum Protect サーバーへのアクセス権が必要です。
- Hyper-V または VMware 仮想マシン・ゲスト内で IBM Spectrum Protect backup-archive client を実行し、仮想マシン・レベルのアプリケーションとゲスト内のクライアントからのアプリケーションの両方をバックアップした場合、保護ファイルは 1 回だけ測定する必要があります。
- Network Data Management Protocol (NDMP) データは、IBM Spectrum Protect サーバーに対して実行される測定スクリプトを使用して、アクティブ・データの一部として測定されます。NDMP データに対して追加の測定アクションは不要です。

構文

Linux

```
dsmfecc-00.pl --tsmusername=user name --tsmpassword=password  
--namespace=[NODENAME | *] --applicationentity=[filespace | *]  
--directory=output directory
```

Windows

```
dsmfecc-00.ps1 -tsmusername user name -tsmpassword password -namespace  
[NODENAME | *] -applicationentity [filespace | *] -directory directory
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--tsmusername=admin
```

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-tsmusername admin
```

tsmusername *username*

IBM Spectrum Protect サーバーにログインするユーザー名を指定します。

tsmpassword *password*

IBM Spectrum Protect サーバーにログインするユーザー名のパスワードを指定します。

namespace [*NODENAME* | *]

以下の値のいずれか 1 つを指定します。

NODENAME

大文字の IBM Spectrum Protect ノード名。

- * IBM Spectrum Protect サーバー上のすべてのノードを照会するには、ワイルドカード文字 (*) を指定します。

applicationentity [*filespace* | *]

以下の値のいずれか 1 つを指定します。

filespace

ファイル・システム名。通常、この名前は IBM Spectrum Protect ファイル・スペース名に対応します。

- * すべてのファイル・システムを照会するには、ワイルドカード文字 (*) を指定します。

directory *output directory*

測定スクリプトによって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリを指定します。

例

Linux この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 ARVID を持つファイル・システム /SMSVT/mmfs1 のフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> ./dsmfecc-00.pl --tsmusername=admin --tsmpassword=admin --namespace=ARVID  
--applicationentity=/SMSVT/mmfs1 --directory=/tmp/dsmfecc_out
```

Windows この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 TANGO を持つファイル・システム /gpfs1 のフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。IBM Spectrum Protect クライアントのインストールは再配置可能であるため、正しいインストール・パスおよび正しい構成へのパスを使用する必要があります。

```
> .\dsmfecc-00.ps1 -namespace TANGO -directory . -tsmusername admin -tsmpassword admin  
-applicationentity /gpfs1 -tsminstall "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient"  
-dsmoptpath "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient\dsm.FE.opt"
```

IBM Spectrum Protect for Mail

Data Protection for IBM Domino

Data Protection for IBM Domino のフロントエンド容量は、保護された IBM Domino データベースのアクティブ・バックアップのサイズとして定義されます。

Data Protection for IBM Domino の測定スクリプトおよび Central Reporting Tool を使用して、フロントエンド容量を測定します。

- アクティブ・バックアップは、保護された各データベースの最新のバックアップ・バージョンから構成されます。このバックアップは、最新のリカバリー・ポイントに保護されたデータベースをリストアするためにリカバリーされるデータの代表です。
- トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
- IBM Spectrum Protect 管理コマンド・ライン・クライアント、および保護データが含まれるすべての IBM Spectrum Protect サーバーへのアクセス権が必要です。
- IBM Spectrum Protect Extended Edition 測定の一環としてアクティブな IBM Domino データベース・バックアップのフロントエンド容量を既に測定している場合は、Data Protection for IBM Domino の容量測定を実行する必要はありません。

構文

Linux

```
dsmfecc-07.pl --tsmusername=user name --tsmpassword=password  
--namespace=NODENAME --directory=output directory
```

Windows

dsmfecc-07.ps1 -tsmusername *user name* **-tsmpassword** *password* **-namespace** *NODENAME* **-directory** *output directory* **tsminstall** *client installation directory* **dsmoptpath** *path and name of client options file*

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

--tsmusername=admin

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

-tsmusername admin

tsmusername *username*

IBM Spectrum Protect サーバーにログインするユーザー名を指定します。

tsmpassword *password*

IBM Spectrum Protect サーバーにログインするユーザー名のパスワードを指定します。

namespace *NODENAME*

大文字で IBM Spectrum Protect ノード名を指定します。

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

tsminstall *client installation directory*

IBM Spectrum Protect クライアントのインストール・ディレクトリーを指定します。

dsmoptpath *path to client options file*

IBM Spectrum Protect クライアント・オプション・ファイルの絶対パスおよび名前を指定します。

例

Linux

この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 WALTZ を指定してフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> ./dsmfecc-07.pl --tsmusername=admin --tsmpassword=admin --namespace=WALTZ  
--directory=/tmp/dsmfecc_out
```

Windows

この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 XORRON を指定してフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-07.ps1 -namespace XORRON -directory . -tsmusername admin -tsmpassword admin  
-tsminstall "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient"  
-dsmoptpath "C:\ProgramFiles\Tivoli\TSM\baclient\dsm.FE.opt"
```

Data Protection for Microsoft Exchange Server

Data Protection for Microsoft Exchange Server のフロントエンド容量は、保護された 1 次 Microsoft Exchange Server データベースの使用サイズとして定義されます。

- トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
- IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、保護された 1 次 Microsoft Exchange Server データベースのサイズのみを測定します。リカバリー・データベース、レプリカ・データベース、および一時データベースのサイズは、ライセンス交付測定に適用されません。
- Microsoft Exchange Server のデータベース可用性グループ (DAG) が使用中の場合、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、DAG 1 次コピーのサイズのみを測定します。

構文

Windows

```
dsmfecc-06.ps1 -namespace name -directory directory
```

パラメーター

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-namespace SALSA
```

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。例えば、Microsoft Exchange Server 名または Exchange Server DAG 名を指定して、フロントエンド容量が報告されているサーバーあるいはグループを識別します。

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

例

Windows

この例では、名前 STAPLE を指定してフロントエンド容量を照会し、操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-06.ps1 -namespace STAPLE -directory .
```

IBM Spectrum Protect for Databases

Data Protection for Oracle

Data Protection for Oracle のフロントエンド容量は、保護された 1 次 Oracle データベースの使用サイズとして定義されます。

- トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
- この手順を試行する前に、以下の条件が満たされていることを確認します。
 - ORACLE_SID 環境変数が正しく設定されている。
 - 測定する Oracle データベースが開いている。
- 測定スクリプトを実行する前に、Oracle インスタンス所有者が使用できる Oracle Server への接続が存在している必要があります。

構文

Linux

```
dsmfecc-02.pl --namespace=name --applicationusername=user name  
--directory=output directory
```

Windows

```
dsmfecc-02.ps1 -namespace name -applicationusername user name -directory  
output directory
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--applicationusername=sysdba
```

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-applicationusername sysdba
```

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。例えば、Oracle サーバー・インスタンスを指定して、フロントエンド容量が報告されているサーバーを識別します。

applicationusername user name

Oracle データベース・サーバーにログインするユーザー名を指定します。

directory output directory

測定スクリプトによって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

例

Linux この例では、既存のデータベース管理者アカウント **SYSDBA** を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 **Test** を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は **/tmp/dsmfecc_out** ディレクトリーに書き込まれます。

```
> su - ora
> ./dsmfecc-02.pl --namespace=Test --applicationusername=sysdba
--directory=/tmp/dsmfecc_out
```

Windows この例では、既存のデータベース管理者アカウント **SYSDBA** を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 **test** を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は **/tmp/dsmfecc_out** ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-02.ps1 -namespace test -applicationusername sysdba -directory .
```

Data Protection for Microsoft SQL Server

Data Protection for Microsoft SQL Server のフロントエンド容量は、保護された 1 次 Microsoft SQL Server データベースの使用サイズとして定義されます。

- ・ トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
- ・ AlwaysOn 可用性グループ (AAG) 内のレプリカ・データベースは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付の測定には含まれません。レプリカ・バックアップが存在する場合でも、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、保護された 1 次 Microsoft SQL Server データベースの測定値のみを使用します。
- ・ Windows PowerShell でこの 測定スクリプト を実行します。PowerShell が Microsoft SQL Server に接続されている必要があります。

構文

Windows

```
dsmfecc-01.ps1 -namespace name -applicationentity database -directory output  
directory
```

パラメーター

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。例えば、Microsoft SQL Server 名または可用性グループ名を指定して、フロントエンド容量が報告されているサーバーあるいはグループを識別します。

applicationentity *database*

測定する Microsoft SQL Server データベースを指定します。

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

例

Windows この例では、現行の Microsoft SQL Server データベースのフロントエンド容量を照会します。これは、名前 peter を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-01.ps1 -applicationentity "." -namespace peter -directory .
```

IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning

Data Protection for SAP for DB2

Data Protection for SAP for DB2 のフロントエンド容量は、保護された 1 次 SAP for DB2 データベースの使用サイズとして定義されます。

トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。

構文

Linux

```
dsmfecc-03.pl --namespace=name --applicationentity=filespace  
--directory=output directory
```

Windows

```
dsmfecc-03.ps1 -namespace name -applicationentity filespace -directory output  
directory
```

パラメーター

Linux 各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--namespace=test
```

Windows 各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-namespace test
```

SAP

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML

出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。例えば、フロントエンド容量が報告されている SAP データベース・サーバーを識別する名前を指定します。

applicationentity database

測定する SAP for DB2 データベースを指定します。

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリを指定します。

例

Linux この例では、SAP for DB2 データベース TESTDB のフロントエンド容量を照会します。これは、名前 FREE を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は /root/dsmfecc_out ディレクトリに書き込まれます。

```
> su - db2erp
> ./dsmfecc-03.pl --namespace=FREE --directory=/root/dsmfecc_out --applicationentity=TESTDB
```

Windows この例では、SAP for DB2 データベース TESTDB のフロントエンド容量を照会します。これは、名前 test を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-03.ps1 -namespace test -directory . -applicationentity=TESTDB
```

Data Protection for SAP for Oracle

Data Protection for SAP for Oracle のフロントエンド容量は、保護された 1 次 SAP for Oracle データベースの使用サイズとして定義されます。

トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。

この手順を試行する前に、以下の条件が満たされていることを確認します。

- ORACLE_SID 環境変数が正しく設定されている。
- 測定する SAP for Oracle データベースが開いている。

構文

Linux

```
dsmfecc-04.pl --namespace=name --applicationusername=name  
--directory=output directory
```

Windows

```
dsmfecc-04.ps1 -namespace name -applicationusername name -directory output  
directory
```

パラメーター

Linux 各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--namespace=test
```

Windows 各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-namespace test
```

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。例えば、フロントエンド容量が報告されている SAP データベース・サーバーを識別する名前を指定します。

applicationusername *name*

SAP for Oracle データベース・サーバーにログインするユーザー名を指定します。

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリを指定します。

例

Linux この例では、既存のデータベース管理者アカウント SYSDBA を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 **test** を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリに書き込まれます。

```
> su - oraerp
> ./dsmfecc-04.pl --namespace=test --applicationusername=sysdba
--directory=/tmp/dsmfecc_out
```

Windows この例では、既存のデータベース管理者アカウント SYSDBA を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 **test** を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリに書き込まれます。

```
> su - oraerp
> .\dsmfecc-04.ps1 -namespace test -applicationusername sysdba -directory .
```

Data Protection for SAP HANA

Data Protection for SAP HANA のフロントエンド容量は、保護された SAP HANA データベースの使用サイズとして定義されます。

トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。

構文

Linux

```
dsmfec-05.pl --applicationusername=username --applicationpassword=password  
--applicationentity=database number --namespace= instance name  
--directory=output directory
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--namespace=vhana
```

namespace *instance name*

測定する SAP HANA データベースのインスタンス名を指定します。

applicationusername *user name*

SAP HANA サーバーにログインするユーザー名を指定します。

applicationpassword *password*

SAP HANA サーバーにログインするユーザー名のパスワードを指定します。

applicationentity *database number*

測定する SAP HANA データベースの数を指定します。

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

例

Linux

この例では、HANA インスタンス vhana05 を指定して、1 つの SAP HANA データベースのフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> ./dsmfec-05.pl --applicationpassword=manager --namespace=vhana05  
--applicationusername=system --applicationentity=1 --directory=/tmp/dsmfecc_out
```

IBM Spectrum Protect Snapshot

IBM Spectrum Protect Snapshot のフロントエンド容量は、保護されたデータベースまたはアプリケーションの使用スペースとして定義されます。

使用するスクリプトは、保護する対象によって異なります。スクリプトを使用して、以下のデータベースおよびアプリケーションが IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている場合に、それらのフロントエンド容量を分析することができます。

- Microsoft Exchange Server データベース
- Microsoft SQL Server データベース
- IBM DB2 データベース

- Oracle データベース
- SAP 環境内の Oracle データベース
- カスタム・アプリケーション

注: 以下のスクリプトは、IBM Spectrum Protect Snapshot が IBM Spectrum Protect Suite バックエンド・バンドルまたはスタンドアロン IBM Spectrum Protect Snapshot ライセンス (PID) によってライセンス交付を受けている場合は、その管理対象容量データも生成します。要約レポートの実行時に `reporttype` パラメーターを指定すると、その他の管理対象容量の値が表示されます。

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された Microsoft Exchange Server データベース

前提条件:

- IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースを実行し、Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。
- Windows PowerShell バージョン 3 以上を使用する必要があります。

構文

Windows

```
dsmfecc-13.ps1 -namespace name -fcminstance instance directory -directory
output directory -tsmoptfile path and name of options file -configFile path and
name of configuration file
```

パラメーター

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ (-) が 1 つ必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-namespace test
```

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

fcminstance instance directory

測定するデータベースが含まれる IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。例えば、次のとおりです。

```
-fcminstance "C:\Program Files\Tivoli\FlashCopyManager"
```

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。例えば、次のとおりです。

```
-directory "C\reports"
```

tsmoptfile path and name of options file

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されるデータベース用に Microsoft Exchange オプション・ファイルの絶対パスを指定します。次に例を示します。

```
-tsmoptfile "C:\Program Files\Tivoli\tsm\TDPEExchange\dsm.opt"
```

configFile path and name of configuration file

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されるデータベース用に Microsoft Exchange 構成ファイルの絶対パスを指定します。例えば、次のとおりです。

```
-configfile "C:\Program Files\Tivoli\tsm\TDPEExchange\tdpexc.cfg"
```

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された Microsoft SQL Server データベース

前提条件:

- IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースを実行し、Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。
- Windows PowerShell バージョン 3 以上を使用する必要があります。

構文

Windows

```
dsmfecc-14.ps1 -namespace name -fcminstance instance directory -directory  
output directory -tsmoptfile path and name of options file -configFile path and  
name of configuration file
```

パラメーター

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ (-) が 1 つ必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-namespace test
```

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

fcminstance *instance directory*

測定するデータベースが含まれる IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。例えば、次のとおりです。

```
-fcminstance "C:\Program Files\Tivoli\FlashCopyManager"
```

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

tsmoptfile *path and name of options file*

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されるデータベース用に Microsoft SQL オプション・ファイルの絶対パスを指定します。次に例を示します。

```
-tsmoptfile "C:\Program Files\Tivoli\tsm\TDPSql\dsm.opt"
```

configFile *path and name of configuration file*

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されるデータベース用に Microsoft SQL 構成ファイルの絶対パスを指定します。例えば、次のとおりです。

```
-configfile "C:\Program Files\Tivoli\tsm\TDPSql\tdpsql.cfg"
```

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された DB2 データベース

前提条件: このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。

構文

Linux

```
dsmfecc-15.p1 --namespace=name --directory=output directory
--applicationentity=database name --fcminstance=instance directory
--fcprofile=path and name of profile
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--tsmusername=admin
```

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

applicationentity database name

測定するデータベースの名前を指定します。

fcminstance instance directory

測定するデータベースを保護する IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。これは、データベース・インスタンス・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内に指定します。例えば、次のとおりです。

```
--fcminstance=/db2/DAB/sql1lib/acs
```

fcprofile path and name of profile

データベース・インスタンス・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内にある IBM Spectrum Protect Snapshot 構成ファイルの絶対パスと名前を指定します。例えば、次のとおりです。

```
--fcprofile=/db2/DAB/sql1lib/acs/profile
```

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された Oracle データベース

このコマンドは、SAP 環境の外部にある Oracle データベースに対して使用します。SAP 環境内の Oracle データベースに対しては、45 ページの『IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された SAP 環境内の Oracle データベース』で指定されたスクリプト・コマンドを使用します。

前提条件: このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。

構文

Linux

```
dsmfecc-16.p1 --applicationpassword=password --namespace=name  
--directory=output directory --fcminstance=instance directory --fcmprofile=path  
and name of profile
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--tsmusername=admin
```

applicationpassword password

データベースにログインするユーザー名のパスワードを指定します。

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

fcminstance instance directory

測定するデータベースを保護する IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。これは、データベース・インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内に指定します。例えば、次のとおりです。

```
--fcminstance=/oracle/DAB/acs
```

fcmprofile path and name of profile

データベース・インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内にある IBM Spectrum Protect Snapshot 構成ファイルの絶対パスと名前を指定します。例えば、次のとおりです。

```
--fcmprofile=/oracle/DAB/acs/profile
```

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された SAP 環境内の Oracle データベース

このコマンドは、SAP 環境内の Oracle データベースに対して使用します。SAP 環境の外部にある Oracle データベースに対しては、44 ページの『IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された Oracle データベース』で指定されたスクリプト・コマンドを使用します。

前提条件: このスクリプトを実行するには、アプリケーション・インスタンス所有者でなければなりません。

構文

Linux

```
dsmfecc-17.p1 --applicationpassword=password --namespace=name  
--directory=output directory --fcminstance=instance directory --fcmprofile=path  
and name of profile
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--tsmusername=admin
```

applicationpassword password

データベースにログインするユーザー名のパスワードを指定します。

namespace name

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

fcminstance instance directory

測定するデータベースを保護する IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。これは、データベース・インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内に指定します。例えば、次のとおりです。

```
--fcminstance=/oracle/DAB/acs
```

fcmprofile path and name of profile

データベース・インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内にある IBM Spectrum Protect Snapshot 構成ファイルの絶対パスと名前を指定します。例えば、次のとおりです。

```
--fcmprofile=/oracle/DAB/acs/profile
```

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されたカスタム・アプリケーション

前提条件:

- Linux スクリプトを実行するには、IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンス所有者でなければなりません。
- Windows IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースおよび Windows 管理コマンドを実行する権限が必要です。

構文

Linux

dsmfecc-18.ps1 --directory=*output directory* **--fcminstance=***instance directory*
--fcmprofile=*path and name of profile* **--filelist=***path and name of file*

Windows

dsmfecc-18.ps1 namespace *name* **-directory** *output directory* **-fcminstance** *instance directory* **-tsmoptfile** *path and name of options file* **-configFile** *path and name of configuration file*

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

--tsmusername=admin

Windows

各パラメーターには先頭にダッシュ (-) が 1 つが必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

-namespace test

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

fcminstance *instance directory*

測定するファイル・システムまたはカスタム・アプリケーションを保護する IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。

Linux

acs ディレクトリーは、アプリケーション・バックアップ・ユーザーのホーム・ディレクトリーのサブディレクトリーです。例えば、次のとおりです。

--fcminstance=/CAA/DAB/acs

Windows

例えば、次のとおりです。

-fcminstance "C:\Program Files\Tivoli\FlashCopyManager"

fcmprofile *path and name of profile*

アプリケーション・バックアップ・ユーザーのホーム・ディレクトリーの acs サブディレクトリー内にある IBM Spectrum Protect Snapshot 構成ファイルの絶対パスと名前を指定します。例えば、次のとおりです。

--fcmprofile=/CAA/DAB/acs/profile

filelist *path and name of file*

IBM Spectrum Protect Snapshot で使用されるファイル・システムおよびカスタム・アプリケーションのリストが含まれるファイルの絶対パスおよび名前を指定します。指定するファイルには、ファイル・システムおよびアプリケーションの絶対パスと名前を含めてください。

tsmoptfile path and name of options file

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されるアプリケーション用にオプション・ファイルの絶対パスを指定します。次に例を示します。

```
-tsmoptfile "C:\Program Files\Tivoli\FlashCopyManager\dsm.opt"
```

configFile path and name of configuration file

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されるアプリケーション用に構成ファイルの絶対パスを指定します。例えば、次のとおりです。

```
-configfile "C:\Program Files\Tivoli\FlashCopyManager\fcmcfg.xml"
```

IBM Spectrum Protect for Space Management

IBM Spectrum Protect for Space Management を使用してファイルをマイグレーションする前に、それらのファイルをバックアップすることが推奨されます。したがって、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、IBM Spectrum Protect for Space Management によって管理されているシステムのアクティブ・バックアップを測定します。この測定には、IBM Spectrum Protect Extended Edition のアクティブ・バックアップが使用されます。

- 階層ストレージ管理 を使用してマイグレーションするファイルをバックアップしない場合、**dsmfecc-08.pl** 測定スクリプトの実行時にマイグレーションするファイルの事前マイグレーション済みサイズとマイグレーション済みサイズが使用されます。
- 階層ストレージ管理 を使用してマイグレーションするファイルをバックアップする場合、IBM Spectrum Protect Extended Edition の測定スクリプトを実行する場合にアクションは不要です。

注: IBM Spectrum Protect for Space Management と IBM Spectrum Protect Backup-Archive Client を使用してスタブ形式でファイルをリストアする場合、IBM Spectrum Protect for Space Management 調整機能を使用して、スタブ・リストアの完了後にフロントエンド容量に関する数値を修正します。

構文

Linux

```
dsmfecc-08.pl --namespace=NODENAME --applicationentity=filespace  
--directory=output directory
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--namespace=NODE3
```

namespace NODENAME

大文字で IBM Spectrum Protect ノード名を指定します。

applicationentity filespace

ファイル・システムのマウント・ポイントを指定します。

directory output directory

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

例

Linux この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 FOXTROT を指定して、ファイル・システム /SMSVT/mmfs1 のフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> ./dsmfecc-08.pl --namespace=FOXTROT --applicationentity=/SMSVT/mmfs1  
--directory=/tmp/dsmfecc_out
```

IBM Spectrum Protect for Virtual Environments

Data Protection for VMware

Data Protection for VMware のフロントエンド容量は、保護された VMware 仮想マシンの使用サイズとして定義されます。

Data Protection for VMware が、ファイル・システムが含まれる、またはバックアップ操作も実行しているアプリケーション固有のエージェントが含まれる仮想マシンを保護している場合、以下の状況が発生します。

- ファイル・システムあるいはアプリケーション固有のエージェントが稼働している仮想マシンについて測定された TB 数も、ファイル・システム・クライアントに関するアクティブ・バックアップ測定、または保護されたアプリケーション・データの測定に使用される手順を使用して報告されます。
- ファイル・システム・クライアントまたは保護されたアプリケーション・データについて報告された測定値を削除することができます。Data Protection for VMware 測定を介して収集されたデータには、このデータが含まれます。

Data Protection for VMware の測定スクリプトを発行するシステムに、VMware vSphere PowerCLI がインストールされている必要があります。

構文

Windows

```
dsmfecc-10.ps1 -applicationusernameVMware vCenter user ID  
-applicationpassword password -applicationentity vCenter Server IP address or  
name -namespace name -asnode NODENAME -directory output directory  
-tsminstall client installation directory -dsmoptpath path and name of client  
options file
```

パラメーター

Windows 各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

-namespace test

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

applicationusername *VMware vCenter user ID*

vCenter ユーザー ID を指定します。

applicationpassword *vCenter password*

vCenter にログインするユーザー ID の vCenter パスワードを指定します。

applicationentity *vCenter Server IP address or name*

vCenter サーバーの IP アドレスまたは名前を指定します。

asnode *NODENAME*

大文字で IBM Spectrum Protect ノード名を指定します。

directory output *directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

tsminstall *client installation directory*

IBM Spectrum Protect クライアントのインストール・ディレクトリーを指定します。

dsmoptpath *path to client options file*

IBM Spectrum Protect クライアント・オプション・ファイルの絶対パスおよび名前を指定します。

例

Windows この例では、VMware vCenter christo.mycompany.usa.com 上の保護された仮想マシンのフロントエンド容量を照会します。これは、名前 FREE を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-10.ps1 -namespace FREE -directory . -applicationusername administrator
-applicationpassword adminpwd -applicationentity christo.mycompany.usa.com -asnode DEV_DC
-dsmoptpath "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient\dsm.DEV_DC.opt"
-tsminstall "c:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient"
```

Data Protection for Microsoft Hyper-V

構文

Data Protection for Microsoft Hyper-V のフロントエンド容量は、保護された仮想マシンの使用サイズとして定義されます。

Windows**dsmfecc-11.ps1 -namespace *name* -directory *output directory***

制約事項: 管理者権限を持つアカウントで dsmfecc-11.ps1 を実行する必要があります。

パラメーター

Windows 各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

`-namespace test`

namespace *name*

XML 出力ファイルで測定操作を識別する名前を指定します。この値は、XML 出力ファイル名の一部になり、操作を簡単に識別できるようにします。

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

例

Windows この例では、既存のデータベース管理者アカウント SYSDBA を使用してフロントエンド容量を照会します。これは、名前 `test` を指定して操作を識別します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-11.ps1 -namespace test -directory .
```

第 5 章 アプリケーション固有のコマンドによるフロントエンド容量の測定

測定スクリプトが使用不可の場合、アプリケーション固有のコマンドを使用してフロントエンド容量測定を計算します。ステップバイステップの手順が提供されています。

IBM Spectrum Protect for Databases

Data Protection for Microsoft SQL Server

Data Protection for Microsoft SQL Server のフロントエンド容量は、保護された 1 次 Microsoft SQL Server データベースの使用サイズとして定義されます。

この手順は、**sp_spaceused** を使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、保護された各 Microsoft SQL Server データベースについて、データに使用されているスペース (data) と索引に使用されているスペース (index_size) を加算することで得られます。これらの値は、保護された各 Microsoft SQL Server データベースに対して **sp_spaceused** を発行することで報告されます。 **sp_spaceused** は、一般の役割で発行できます。
 - トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
 - AlwaysOn 可用性グループ (AAG) 内のレプリカ・データベースは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付の測定には含まれません。レプリカ・バックアップが存在する場合でも、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、保護された 1 次 Microsoft SQL Server データベースの測定値のみを使用します。
1. 環境内の保護された各 Microsoft SQL Server データベースに対して **sp_spaceused** を発行します。例えば、次のとおりです。

```
USE [AdventureWorks2012]
GO
EXEC sp_spaceused
GO
```

この例では、データベース AdventureWorks2012 について以下のサイズが表示されます。

| Results | | Messages | |
|---------|--------------------|---------------|-------------------|
| | database_name | database_size | unallocated space |
| 1 | AdventureWorks2012 | 205.75 MB | 14.95 MB |

| | reserved | data | index_size | unused |
|---|-----------|----------|------------|---------|
| 1 | 194608 KB | 97016 KB | 88048 KB | 9544 KB |

2. データベース AdventureWorks2012 の使用サイズを判別するには、data および index_size の値を加算します。

- **database_size:** Database size (data files + log files) = 205.75 MB
- **unallocated space:** Space that is *not* reserved for use either by data or log files (Space Available) = 14.95 MB
- **reserved:** Space that is reserved for use by data and log files = 190.05 MB
- **data:** Space used by data = 97016 KB/1024 = 94.74 MB
- **index_size:** Space used by indexes = 88048 KB/1024 = 85.99 MB
- **unused:** Portion of the reserved space, which is not yet used = 9544 KB/1024 = 9.32 MB

$$94.74 + 85.99 = 180.73 \text{ MB}$$

この例では、保護された 1 次 Microsoft SQL Server データベース (AdventureWorks2012) の使用サイズは 180.73 MB です。この値を GB に変換します。

$$180.73 \text{ MB} / 1024 = .18 \text{ GB}$$

3. 環境内の保護された各 SQL Server データベースに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。
4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。

- a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。

[AdventureWorks2012] 94.74 (data) + 85.99 (index_size) = 180.73 MB (.18 GB)
 [HR2013] 495.91 (data) + 202.71 (index_size) = 698.62 MB (.68 GB)
 [FinInv2013] 713.65 (data) + 298.47 (index_size) = 1012.12 MB (.99 GB)
 [IntComm2014] 689.11 (data) + 389.04 (index_size) = 1078.15 MB (1.1 GB)
 [FacUpgrd2014] 865.09 (data) + 315.88 (index_size) = 1180.97 MB (1.2 GB)

保護されたすべての Microsoft SQL Server データベースの合計使用サイズは 4.15 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。

$$4.15 \text{ GB} / 1024 = .004 \text{ TB}$$

- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

Data Protection for Oracle

Data Protection for Oracle のフロントエンド容量は、保護された 1 次 Oracle データベースの使用サイズとして定義されます。

この手順は、**select sum** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、保護された各 1 次 Oracle データベースについて **select sum** SQLPlus ステートメントによって報告された **dba_segments** オプションのサイズの値によって識別されます。
 - トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
 - この手順を試行する前に、以下の条件が満たされていることを確認します。
 - ORACLE_SID 環境変数が正しく設定されている。
 - 測定する Oracle データベースが開いている。
1. Oracle インスタンス所有者として、環境内の保護された 1 次 Oracle データベースに対して **select sum** SQLPlus ステートメントを発行します。例えば、次のとおりです。

```
SELECT SUM(bytes)/1024/1024 "Meg" FROM dba_segments;
```

Oracle データベースについて、以下の出力が返されます。

```
bash-3.00$ sqlplus / as sysdba

SQL*Plus: Release 11.1.0.7.0 - Production on Fri May 9 21:51:42 2014

Copyright (c) 1982, 2008, Oracle. All rights reserved.

Connected to:
Oracle Database 11g Enterprise Edition Release 11.1.0.7.0 - 64bit Production
With the Partitioning, OLAP, Data Mining and Real Application Testing options

SQL> SELECT SUM(bytes)/1024/1024 "Meg" FROM dba_segments;

           Meg
-----
6864275632.351563
```

2. データベースの使用サイズを判別するには、dba_segments ビューから選択します。この例では、保護された 1 次 Oracle データベースの使用サイズは 6864275632.351563 バイトです。この値を GB に変換します。
$$6864275632.351563 \text{ MB} / 1024 = 6703394.17 \text{ GB}$$
3. 環境内の保護された各 1 次 Oracle データベースに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。
4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。
 - a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。
[FinArch] 6703394.17 GB
[Facilities] 19.62 GB
[InvestA] 86.92 GB
[HRfinan] 108.65 GB
[Consumer] 121.91 GB

保護されたすべての Oracle データベースの合計使用サイズは 6703731.27 GB です。
 - b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。
$$6703731.27 \text{ GB} / 1024 = 6546.61 \text{ TB}$$
 - c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning

IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning のフロントエンド容量は、保護された 1 次データベースの使用サイズとして定義されます。

Data Protection for SAP for DB2

この手順は、**GET_DBSIZE_INFO** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、保護された 1 次 SAP for DB2 データベースについて、**GET_DBSIZE_INFO** コマンドによって報告された database_size オプションの値によって識別されます。
- トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。

1. DB2 インスタンス所有者として、環境内の保護された各 SAP for DB2 データベースに対して、**GET_DBSIZE_INFO** コマンドを発行します。例えば、次のとおりです。

```
db2as2@acsprod1:/db2/AS2>db2 "call get_dbsize_info(?,?,?,-1)"
```

この例では、SAP for DB2 データベース AS2 について以下のサイズが表示されます。

```
db2as2@acsprod1:/db2/AS2>db2 connect to as2

Database Connection Information

Database server          = DB2/AIX64 10.1.2
SQL authorization ID    = DB2AS2
Local database alias    = AS2

db2as2@acsprod1:/db2/AS2>db2 "call get_dbsize_info(?,?,?,-1)"

Value of output parameters
-----
Parameter Name : SNAPSHOTTIMESTAMP
Parameter Value : 2014-05-09-22.21.13.645735

Parameter Name : DATABASESIZE
Parameter Value : 356594432376

Parameter Name : DATABASECAPACITY
Parameter Value : 479773184423

Return Status = 0
```

2. SAP for DB2 データベース AS2 の使用サイズを判別するには、パラメーター DATABASESIZE の「Parameter Value」を使用します。この例では、この値は 356594432376 バイトです。この値を GB に変換します。

```
356594432376 / 1024 = 348236750.37 KB
```

```
348236750.37 / 1024 = 340074.95 MB
```

```
340074.95 / 1024 = 332.1 GB
```

この例では、保護された 1 次 SAP for DB2 データベースの使用サイズは 332.1 GB です。

3. 環境内の保護された各 SAP for DB2 データベースに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。

4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。

- a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。

```
[AS2] 332.1 GB
[AS3] 119.62 GB
[AS4] 281.87 GB
[AS5] 518.51 GB
[AS6] 611.79 GB
```

保護されたすべての SAP for DB2 データベースの合計使用サイズは 1863.89 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。

```
1863.89 GB /1024 = 1.82 TB
```

- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

Data Protection for SAP HANA

この手順は、**select sum** SQLPlus ステートメントを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、保護された SAP HANA データベースについて **select sum** SQLPlus ステートメントによって報告された `allocated_page_size` オプションの値によって識別されます。 **select sum** は、一般の役割で発行できます。
 - トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
1. SAP HANA インスタンス所有者 (<SID>ADM) として、環境内の保護された 1 次 SAP HANA データベースに対して **select sum** SQLPlus ステートメントを発行します。例えば、次のとおりです。

```
esdhana01:/usr/sap/SUP/HDB00> hdbsql -i 00 -u system -p manager
'select sum(allocated_page_size) from M_CONVERTER_STATISTICS'
```

SAP HANA データベースについて、以下の出力が表示されます。

```
esdhana01:/usr/sap/SUP/HDB00> hdbsql -i 00 -u system -p manager
'select sum(allocated_page_size) from M_CONVERTER_STATISTICS'
SUM(ALLOCATED_PAGE_SIZE)
91032388608
1 row selected (overall time 20.633 msec; server time 19.802 msec)
```

2. SAP HANA データベースの使用サイズを判別するには、`allocated_page_size` の値を使用します。この例では、値は 91032388608 バイトです。この値を GB に変換します。

$$91032388608 / 1024 = 89160028 \text{ KB}$$

$$89160028 / 1024 = 87070 \text{ MB}$$

$$87070 / 1024 = 85 \text{ GB}$$

この例では、保護された 1 次 SAP HANA データベースの使用サイズは 85 GB です。

3. 環境内の保護された各 1 次 SAP HANA データベースに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。
4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。

- a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。

```
[HDB00] 85 GB  
[HDB01] 195.8 GB  
[HDB02] 208.2 GB  
[HDB03] 465.5 GB  
[HDB04] 118.7 GB
```

保護されたすべての SAP HANA データベースの合計使用サイズは 1073.2 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。

$1073.2 \text{ GB} / 1024 = 1.1 \text{ TB}$

- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。

- 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
- 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

Data Protection for SAP for Oracle

この手順は、**select sum** SQLPlus ステートメントを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、保護された各 1 次 SAP for Oracle データベースについて **select sum** SQLPlus ステートメントによって報告された dba_segments オプションのサイズの値によって識別されます。
 - トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
 - この手順を試行する前に、以下の条件が満たされていることを確認します。
 - ORACLE_SID 環境変数が正しく設定されている。
 - 測定する SAP for Oracle データベースが開いている。
1. Oracle インスタンス所有者として、環境内の保護された 1 次 SAP for Oracle データベースに対して **select sum** SQLPlus ステートメントを発行します。例えば、次のとおりです。

```
SELECT SUM(bytes)/1024/1024 "Meg" FROM dba_segments;
```

SAP for Oracle データベースについて、以下の出力が表示されます。

```

bash-3.00$ sqlplus / as sysdba

SQL*Plus: Release 11.1.0.7.0 - Production on Fri May 9 21:51:42 2014

Copyright (c) 1982, 2008, Oracle. All rights reserved.

Connected to:
Oracle Database 11g Enterprise Edition Release 11.1.0.7.0 - 64bit Production
With the Partitioning, OLAP, Data Mining and Real Application Testing options

SQL> SELECT SUM(bytes)/1024/1024 "Meg" FROM dba_segments;

          Meg
-----
6864275632.351563

```

2. データベースの使用サイズを判別するには、dba_segments ビューから選択します。この例では、保護された 1 次 SAP for Oracle データベースの使用サイズは 6864275632.351563 MB です。この値を GB に変換します。

$6864275632.351563 \text{ MB} / 1024 = 6703394.17 \text{ GB}$

3. 環境内の保護された各 1 次 SAP for Oracle データベースに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。

4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。

- a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。

```

[FinArch] 6703394.17 GB
[Facilities] 19.62 GB
[InvestA] 86.92 GB
[HRfinan] 108.65 GB
[Consumer] 121.91 GB

```

保護されたすべての SAP for Oracle データベースの合計使用サイズは 6703731.27 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。

$6703731.27 \text{ GB} / 1024 = 6546.61 \text{ TB}$

- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。

- 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
- 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect Snapshot

IBM Spectrum Protect Snapshot のフロントエンド容量は、保護された 1 次データベースまたはアプリケーションの使用サイズとして定義されます。

以下の手順は、IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されているが、IBM Spectrum Protect にオフロードされていないファイル・システムのフロントエンド容量測定を手動で計算する方法について説明しています。その他のすべての IBM Spectrum Protect Snapshot フロントエンド・シナリオは、それぞれのセクションでカバーしています。

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された Windows ファイル・システムのフロントエンド容量の測定

この手順は、**diskpart** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。測定スクリプトを使用してこの測定を計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の手順に従います。

- 以下のすべての要件を満たす Windows システム上のドライブをすべて識別します。
 - ドライブが IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている。
 - ドライブのバックアップが IBM Spectrum Protect にオフロードされていない。
- コマンド・プロンプトを開きます。必ず、「管理者として実行」を選択してプロンプトを実行してください。
- プロンプトで **diskpart** と入力して、Diskpart コマンド・ライン・ユーティリティを開始します。
- list volume** コマンドを発行します。例えば、次のとおりです。

```
DISKPART> list volume
```

| Volume ### | Ltr | Label | Fs | Type | Size | Status | Info |
|------------|-----|-------------|------|-----------|---------|----------|---------|
| Volume 0 | D | GRMSXFRER_E | UDF | CD-ROM | 3019 MB | Healthy | |
| Volume 1 | E | | | DVD-ROM | 0 B | No Media | |
| Volume 2 | H | | | DVD-ROM | 0 B | No Media | |
| Volume 3 | | | | Partition | 100 MB | Healthy | Offline |
| Volume 4 | C | Local | NTFS | Partition | 2000 GB | Healthy | Boot |
| Volume 5 | P | P_DRIVE | NTFS | Partition | 14 GB | Healthy | |
| Volume 6 | F | New Volume | NTFS | Partition | 350 MB | Healthy | |

- 保護されたドライブの使用サイズを GB 単位で判別するには、以下のステップを実行します。
 - 保護されたドライブに対して **select volume** コマンドを発行します。

例えば、ボリューム 4 が保護されたドライブである場合、次のコマンドを発行します。

```
DISKPART> select volume 4
```

```
Volume 4 is the selected volume.
```

- detail volume** コマンドを発行します。

例えば、次のとおりです。

```
DISKPART> detail volume
```

| Disk ### | Status | Size | Free | Dyn | Gpt |
|-----------|--------|---------|------|-----|-----|
| * Disk 0 | Online | 2001 GB | | 0 B | |
| Read-only | | : No | | | |

Hidden : No
No Default Drive Letter: No
Shadow Copy : No
Offline : No
BitLocker Encrypted : No
Installable : Yes

Volume Capacity : 2000 GB
Volume Free Space : 979 GB

- c. Volume Capacity から Volume Free Space を引くことで、保護されたドライブの使用サイズを GB 単位で計算します。

例えば、次のとおりです。

2000 GB (Volume Capacity) - 979 GB (Volume Free Space) = 1021 GB

重要: **detail volume** コマンドで容量が MB 単位で表示される場合は、MB を GB に変換してください。MB 値を 1024 で割ると GB に変換されます。

6. ステップ 1 でリストされたすべての要件を満たす各ドライブに対して、ステップ 5 を繰り返します。
7. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。
- a. 以下の 6 つのドライブを保護しており、保護された各ドライブに使用サイズ値 (GB 単位) を追加すると仮定します。

[Volume 1] 1021 GB
[Volume 2] 360.2 GB
[Volume 3] 1193.5 GB
[Volume 4] 520 GB
[Volume 5] 806.3 GB
[Volume 6] 244.8 GB

保護されているすべてのドライブの合計使用サイズは 4245.8 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。
- 4245.8 GB / 1024 = 4.01 TB
- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
- 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護された Linux または UNIX のファイル・システムのフロントエンド容量の測定

この手順は、**df** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。測定スクリプトを使用してこの測定を計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の手順に従います。

1. IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されているファイル・システムが含まれているシステム上で、次のコマンドを発行します。

```
df -m
```

2. 以下の両方の要件を満たす Linux システムまたは UNIX システム上のすべてのファイル・システムを識別します。
 - ファイル・システムが IBM Spectrum Protect Snapshot によって保護されている。
 - ファイル・システムのバックアップが IBM Spectrum Protect にオフロードされていない。
3. ステップ 2 でリストされた要件を満たす各ファイル・システムについて、Used フィールドに示された数値を確認します。
4. 保護されている各ファイル・システムについて、Used 値を MB から GB に変換します。

例えば、Used 値が 340074 MB であるとします。GB に変換するには、この数値を 1024 で割ります。

$$340074 / 1024 = 332.1 \text{ GB}$$

5. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。
 - a. 保護された各ファイル・システムについて、Used 値 (GB 単位) を追加します。

```
[/dev/hda3] 768.9  GB
[/dev/hda1] 321.4  GB
[/dev/hda2opt] 910.1 GB
[/dev/sda2] 206    GB
[/dev/sdc1] 770.4  GB
[/dev/sdd1] 841.5  GB
```

保護されているすべてのドライブの合計使用サイズは 3818.3 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。
$$3818.3 \text{ GB} / 1024 = 3.73 \text{ TB}$$
- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server

Data Protection for Microsoft Exchange Server のフロントエンド容量は、保護された 1 次 Microsoft Exchange Server データベースの使用サイズとして定義されます。

この手順は、**Get-MailboxDatabase -status** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、保護された各 Microsoft Exchange Server 2007 (以降) データベースについて、**Get-MailboxDatabase -status** コマンドによって報告された DatabaseSize 値によって識別されます。
- トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
- IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、保護された 1 次 Microsoft Exchange Server データベースのサイズのみを測定します。リカバリー・データベース、レプリカ・データベース、および一時データベースのサイズは、ライセンス交付測定に適用されません。
- Microsoft Exchange Server のデータベース可用性グループ (DAG) が使用中の場合、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、DAG 1 次コピーのサイズのみを測定します。

1. 環境内の保護された各 1 次 Microsoft Exchange Server データベースに対して Windows PowerShell 照会を発行します。例えば、次のとおりです。

```
C:\Windows\system32>Get-MailboxDatabase -status | where {$_.Recovery -eq $false }  
| select name,databasesize,last*
```

この例では、Microsoft Exchange Server データベース Mailbox Database 2117215819 について、以下のサイズが表示されます。

```
Name : Mailbox Database 2117215819  
DatabaseSize : 136.1 MB (142,671,872 bytes)  
LastFullBackup : 3/27/2014 3:09:47 PM  
LastIncrementalBackup :  
LastDifferentialBackup :  
LastCopyBackup :
```

2. Exchange Server データベースの使用サイズを判別するには、DatabaseSize オプションの値を使用します。この例では、値は 136.1 MB です。この値を GB に変換します。
$$136.1 \text{ MB} / 1024 = .13 \text{ GB}$$
3. 環境内の保護された各 1 次 Microsoft Exchange Server データベースに対して ステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。
4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。
 - a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。


```
[Mailbox Database 2117215819] .13 GB
[Mailbox Database02] 9.62 GB
[Mailbox Database03] 12.92 GB
[Mailbox Database04] 18.65 GB
[Mailbox Database05] 11.91 GB
```

保護されたすべての Microsoft Exchange Server データベースの合計使用サイズは 53.23 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。
 $53.23 \text{ GB} / 1024 = .05 \text{ TB}$
- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect for Space Management

IBM Spectrum Protect for Space Management を使用してファイルをマイグレーションする前に、それらのファイルをバックアップすることが推奨されます。したがって、IBM Spectrum Protect Suite – Front End は、IBM Spectrum Protect for Space Management によって管理されているシステムのアクティブ・バックアップを測定します。この測定には、IBM Spectrum Protect Extended Edition のアクティブ・バックアップが使用されます。

この手順は、**dsmdf** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

階層ストレージ管理 を使用してマイグレーションするファイルをバックアップしない場合、マイグレーションするファイルの事前マイグレーション済みサイズとマイグレーション済みサイズが使用されます。事前マイグレーション済みファイルのフロントエンド容量測定を計算するには、以下のステップを実行します。

1. root ユーザーとして、各管理対象ファイル・システムに対して **dsmdf -detail file system mount point** コマンドを実行します。例えば、次のとおりです。

```
root@blackpearl > dsmdf -detail /gpfs1
```

```
HSM Filesystem:      /gpfs1
FS State:            active
Migrated Size:       1024000
Premigrated Size:    43856
Migrated Files:      10323
Premigrated Files:   2003000
Unused Inodes:       472554
Free Size:           485286400
```

2. マイグレーション済みファイルのサイズを判別するには、Migrated Size および Premigrated Size で識別された値を使用します。この値を GB に変換します。

Migrated Size: 1024000 KB / 1024 / 1024 = 0.98 GB

Premigrated Size: 43856 KB / 1024 / 1024 = 0.42 GB

Sum: 0.98 GB + 0.42 GB = 1.4 GB

この例では、この値は 1.4 GB です。

3. 各マイグレーション済みファイル・システムに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。必ず、各事前マイグレーション済みサイズの値を GB に変換してください。

4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。

- a. 各マイグレーション済みファイル・システムについて、事前マイグレーション済みサイズおよびマイグレーション済みサイズ (GB 単位) を加算します。

```
[gpfs1] 1.4 GB
[gpfs3] 1018.75 GB
[fs4] 78.55 GB
[fs5] 109.18 GB
[fs6] 273.99 GB
[fs7] 206.80 GB
```

すべてのマイグレーション済みファイル・システムの事前マイグレーション済みサイズおよびマイグレーション済みサイズの合計は 1688.67 GB です。

- b. 合計サイズを GB から TB に変換します。

1688.67 GB / 1024 = 1.65 TB

- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。

- 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
- 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力 (.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

IBM Spectrum Protect for SAN

IBM Spectrum Protect for SAN により、クライアント・システムが、ストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) に接続されたストレージ・デバイスとの間で直接データを書き込みあるいは読み取りできるようになります。IBM Spectrum Protect for SAN が読み取りおよび書き込みを許可するデータは、IBM Spectrum Protect クライアントによって既に保護および測定されています。したがって、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付のために IBM Spectrum Protect for SAN を測定する必要はありません。

IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware

Data Protection for VMware のフロントエンド容量は、保護された仮想マシンの使用サイズとして定義されます。

この手順は、VMware vSphere PowerCLI の **get-vm** コマンドを使用してフロントエンド容量測定を手動で計算する方法を説明しています。この測定値を 測定スクリプト を使用して計算するには、21 ページの『第 2 章 スクリプトによるフロントエンド容量の測定』の指示に従います。

- 使用サイズは、以下の VMware インターフェースのいずれかを使用して識別されます。
 - 保護された各仮想マシンについて、VMware vSphere PowerCLI の **get-vm** コマンドによって報告された **UsedSpaceGB** 値。
 - 保護された各仮想マシンについて、VMware View Administrator インターフェースの仮想マシン・プロパティの「リソース」ダイアログに表示される「使用済みストレージ」の値。
- **UsedSpaceGB** および「使用済みストレージ」の値は、仮想マシン・ディレクトリー内で仮想マシン・ファイルが占有しているスペースを示します。そのようなファイルには、構成ファイル、ログ・ファイル、VMDK ファイル、およびスナップショット・ファイルなどがあります。**UsedSpaceGB** および「使用済みストレージ」の値は、仮想マシンの電源がオンにされると変化します。この小さな変化は、仮想マシン・ディレクトリー内にスワップ・ファイルが作成され、仮想マシンの電源をオフにすると消失するために発生します。

Data Protection for VMware が、ファイル・システムが含まれる、またはバックアップ操作も実行しているアプリケーション固有のエージェントが含まれる仮想マシンを保護している場合、以下の状況が発生します。

- ファイル・システムあるいはアプリケーション固有のエージェントが稼働している仮想マシンについて測定された TB 数も、ファイル・システム・クライアントに関するアクティブ・バックアップ測定、または保護されたアプリケーション・データの測定に使用される手順を使用して報告されます。
- ファイル・システム・クライアントまたは保護されたアプリケーション・データについて報告された測定値を削除することができます。Data Protection for VMware 測定を介して収集されたデータには、このデータが含まれます。

Data Protection for VMware を使用して仮想ホスト上のすべての仮想マシンを保護している場合、次の VMware vSphere PowerCLI **get-vm** コマンドを使用して、保護されたすべての仮想マシンの使用サイズを集計することができます。

```
PowerCLI C:\Program Files\VMware\Infrastructure\VMware PowerCLI> get-vm | measure-property UsedSpaceGB -Sum
```

この例では、次のようになります。

```
PowerCLI C:\Program Files\VMware\Infrastructure\PowerCLI> get-vm | measure
-property UsedSpaceGB -Sum

Count      : 622
Average    :
Sum        : 37289.9345116299
Maximum    :
Minimum    :
Property   : UsedSpaceGB
```

仮想ホスト上の保護されたすべて (622 個) の仮想マシンの使用サイズは 36 TB です。

$37289 \text{ GB} / 1024 = 36 \text{ TB}$

個々の仮想マシンの使用サイズを判別するには、以下のステップを実行します。





1. 環境内の保護された各 VMware 仮想マシンに対して、VMware vSphere PowerCLI の **get-vm** コマンドを発行します。例えば、次のとおりです。

```
PowerCLI C:\Windows\system32> get-vm "Linux SLES11sp1" | Select Name,
UsedSpaceGB, ProvisionedSpaceGB
```

この例では、仮想マシン Linux SLES11sp1 について以下のサイズが表示されます。

| Name | UsedSpaceGB | ProvisionedSpaceGB |
|-----------------|-------------|--------------------|
| Linux SLES11sp1 | 10.62144 | 21.04624 |

オプションで、これらのサイズは、VMware 管理者インターフェースの仮想マシン・プロパティの「リソース」ダイアログに表示されます。

| Resources | | |
|---|---|---|
| Consumed Host CPU: | | 418 MHz |
| Consumed Host Memory: | | 361.00 MB |
| Active Guest Memory: | | 133.00 MB |
| | Refresh Storage Usage | |
| Provisioned Storage: | | 21.05 GB |
| Not-shared Storage: | | 10.62 GB |
| Used Storage: | | 10.62 GB |
| Storage | Status | Drive Type |
|  TSMCVTESX1B:Lo... |  Warning | Non-SSD |
| <div> <div></div> <div>100%</div> <div></div> </div> | | |
| Network | Type | Status |
|  VM Network | Standard port group |  |
| <div> <div></div> <div>100%</div> <div></div> </div> | | |

2. 仮想マシンの使用サイズを判別するには、UsedSpaceGB (VMware vSphere PowerCLI) または「使用済みストレージ」(VMware 管理者インターフェース) に示された値を使用します。この例では、値は 10.62 GB です。
3. 環境内の保護された各 VMware 仮想マシンに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。
4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。
 - a. 保護された各仮想マシンについて、使用サイズ (GB 単位) を加算します。

```
[Linux SLES11sp1] 10.62 GB
[Linux SLES11sp1_prod] 13.94 GB
[Windows 2012R2] 17.03 GB
[Windows 2012R2_prod] 15.71 GB
[Windows 2012R2_rec] 20.44 GB
```

保護されたすべての仮想マシンの合計使用サイズは 77.74 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。

$$77.74 \text{ GB} / 1024 = .08 \text{ TB}$$
- c. 保護された TB の合計を、全体の IBM Spectrum Protect Suite – Front End 容量測定に以下のいずれかの方法で加算します。
 - 25 ページの『第 3 章 手動でのフロントエンド容量の測定』に記載されているように、保護された合計 TB 数を手動で Central Reporting Tool に入力します。
 - 保護された TB 出力の合計を希望のフォーマットに統合します。これらの結果を自動化された Central Reporting Tool 出力

(.TXT/.CSV/.JSON) と組み合わせて、IBM Spectrum Protect Suite – Front End のライセンスを交付する TB の全体数を表します。

第 6 章 IBM Spectrum Protect API バックアップ

IBM Spectrum Protect API バックアップのフロントエンド容量は、保護データのタイプに基づきます。

- ファイル・システム・バックアップの場合、このオフアリングにより、保護ファイルのアクティブ・バックアップに対するライセンスが交付されます。アクティブ・バックアップは、最新のバックアップ・ファイルから構成されます。このバックアップは、最新のリカバリー・ポイントに保護ファイルをリストアするためにリカバリーされるデータの代表です。
- その他のアプリケーションの場合、このオフアリングは、保護アプリケーション(ログ・ファイルを除く)の使用サイズに対するライセンスを交付します。

IBM Spectrum Protect Data Protection クライアントによって作成されていない IBM Spectrum Protect API バックアップのフロントエンド容量を測定する場合、保護している特定のアプリケーションを測定するために選択可能なアプローチについて、IBM 担当者に相談してください。

例えば、保護された DB2 データベースのフロントエンド TB 数を判別するには、以下のステップを実行します。

1. DB2 インスタンス所有者として、環境内の保護された各 DB2 データベースに対して、**GET_DBSIZE_INFO** コマンドを発行します。例えば、次のとおりです。

```
db2as8@acsprod1:/db2/AS8>db2 "call get_dbsize_info(?,?,?,-1)"
```

この例では、DB2 データベースについて以下のサイズが表示されます。

```
db2as2@acsprod1:/db2/AS8>db2 connect to as2

Database Connection Information

Database server      = DB2/AIX64 10.1.2
SQL authorization ID = DB2AS8
Local database alias = AS8

db2as8@acsprod1:/db2/AS8>db2 "call get_dbsize_info(?,?,?,-1)"

Value of output parameters
-----
Parameter Name : SNAPSHOTTIMESTAMP
Parameter Value : 2014-05-09-22.21.13.645735

Parameter Name : DATABASESIZE
Parameter Value : 356594432376

Parameter Name : DATABASECAPACITY
Parameter Value : 479773184423

Return Status = 0
```

2. DB2 データベース AS8 の使用サイズを判別するには、「Parameter Value」を使用します。この例では、この値は 356594432376 バイトです。この値を GB に変換します。

$356594432376 / 1024 = 348236750.37 \text{ KB}$

$348236750.37 / 1024 = 340074.95 \text{ MB}$

$340074.95 / 1024 = 332.1 \text{ GB}$

この例では、保護された 1 次 DB2 データベースの使用サイズは 332.1 GB です。

3. 環境内の保護された各 DB2 データベースに対してステップ 1 およびステップ 2 を繰り返します。各 使用サイズ の値を必ず GB に変換してください。
4. IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス交付に必要なフロントエンド TB 数を判断するには、以下のステップを実行します。
 - a. 保護された各データベースの 使用サイズ 値 (GB) を加算します。

[AS8] 332.1 GB

[AS9] 119.62 GB

[AS10] 281.87 GB

[AS11] 518.51 GB

[AS12] 611.79 GB

保護されたすべての DB2 データベースの合計使用サイズは 1863.89 GB です。

- b. 合計 使用サイズ を GB から TB に変換します。

$1863.89 \text{ GB} / 1024 = 1.82 \text{ TB}$

付録. このバージョンで含まれなくなった製品のスクリプト

以下のスクリプトは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End バージョン 8.1 で含まれなくなった製品用です。ここでは、旧バージョンの製品を使用している場合のために、便宜上記載されています。これらの製品が含まれる最後のリリースに関する完全な資料については、バージョン 7.1.6 の「*IBM Spectrum Protect Suite Front End Licensing Guide*」(ftp://public.dhe.ibm.com/storage/tivoli-storage-management/front_end_capacity_measurement_tools) を参照してください。

Data Protection for IBM Domino

Data Protection for IBM Domino のフロントエンド容量は、保護された IBM Domino データベースのアクティブ・バックアップのサイズとして定義されます。

Data Protection for IBM Domino の測定スクリプトおよび Central Reporting Tool を使用して、フロントエンド容量を測定します。

- アクティブ・バックアップは、保護された各データベースの最新のバックアップ・バージョンから構成されます。このバックアップは、最新のリカバリー・ポイントに保護されたデータベースをリストアするためにリカバリーされるデータの代表です。
- トランザクション・ログ・ファイルは、IBM Spectrum Protect Suite – Front End ライセンス用の測定には含まれていません。
- IBM Spectrum Protect 管理コマンド・ライン・クライアント、および保護データが含まれるすべての IBM Spectrum Protect サーバーへのアクセス権が必要です。
- IBM Spectrum Protect Extended Edition 測定の一環としてアクティブな IBM Domino データベース・バックアップのフロントエンド容量を既に測定している場合は、Data Protection for IBM Domino の容量測定を実行する必要はありません。

構文

Linux

```
dsmfeccl-07.pl --tsmusername=user name --tspmpassword=password  
--namespace=NODENAME --directory=output directory
```

Windows

```
dsmfeccl-07.ps1 -tsmusername user name -tspmpassword password -namespace  
NODENAME -directory output directory tsminstall client installation directory  
dsmoptpath path and name of client options file
```

パラメーター

Linux 各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--tsmusername=admin
```

Windows 各パラメーターには先頭にダッシュ 1 個 (-) が必要です。各変数は、パラメーターとはスペースで区切られています。例えば、次のとおりです。

```
-tsmusername admin
```

tsmusername *username*

IBM Spectrum Protect サーバーにログインするユーザー名を指定します。

tsmpassword *password*

IBM Spectrum Protect サーバーにログインするユーザー名のパスワードを指定します。

namespace *NODENAME*

大文字で IBM Spectrum Protect ノード名を指定します。

directory output *directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

tsminstall client installation *directory*

IBM Spectrum Protect クライアントのインストール・ディレクトリーを指定します。

dsmoptpath *path to client options file*

IBM Spectrum Protect クライアント・オプション・ファイルの絶対パスおよび名前を指定します。

例

Linux この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 WALTZ を指定してフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は /tmp/dsmfecc_out ディレクトリーに書き込まれます。

```
> ./dsmfecc-07.pl --tsmusername=admin --tsmpassword=admin --namespace=WALTZ  
--directory=/tmp/dsmfecc_out
```

Windows この例では、IBM Spectrum Protect ノード名 XORRON を指定してフロントエンド容量を照会します。出力ファイル (.XML) は現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

```
> .\dsmfecc-07.ps1 -namespace XORRON -directory . -tsmusername admin -tsmpassword admin  
-tsminstall "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient"  
-dsmoptpath "C:\Program Files\Tivoli\TSM\baclient\dsm.FE.opt"
```

VMware 仮想マシンを保護する IBM Spectrum Protect Snapshot

前提条件: IBM Spectrum Protect Snapshot コマンド・ライン・インターフェースを実行する権限が必要です。

構文

Linux

```
dsmfecc-19.p1 --directory=output directory --fcminstance=instance directory  
--fcmprofile=path and name of profile
```

パラメーター

Linux

各パラメーターには先頭にダッシュ 2 個 (--) が必要です。各変数は、パラメーターとは等号 (=) で区切られています。等号 (=) と変数の間にスペースはありません。例えば、次のとおりです。

```
--tsmusername=admin
```

directory *output directory*

測定スクリプト によって生成される出力ファイル (.XML) を配置するディレクトリーを指定します。

fcminstance *instance directory*

測定する仮想マシンが含まれる IBM Spectrum Protect Snapshot インスタンスのディレクトリーを指定します。

fcmprofile *path and name of profile*

IBM Spectrum Protect Snapshot プロファイル構成ファイルの絶対パスおよび名前を指定します。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料は、IBM から他の言語でも提供されている可能性があります。ただし、これ入手するには、本製品または当該言語版製品を所有している必要がある場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM® 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Director of Licensing
IBM Corporation
North Castle Drive, MD-NC119
Armonk, NY 10504-1785
US

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

本書に含まれるパフォーマンス・データは、特定の動作および環境条件下で得られたものです。実際の結果は、異なる可能性があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。「© (お客

様の会社名) (西暦年)」。このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. _年を入れる_。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標です。

Linear Tape-Open、LTO、および Ultrium は、HP、IBM Corp. および Quantum の米国およびその他の国における商標です。

Intel および Itanium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、および Windows NT は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java[™] およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用範囲

IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商用使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権限 ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、

データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話、またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie などの各種テクノロジーの使用について詳しくは、『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメントのハイライト』 (<http://www.ibm.com/privacy/jp/ja/>)、『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』 (<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』というタイトルのセクション、および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』 (<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。



Printed in Japan